

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先:

東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号 400円

特集 8・15とアジア

■「大東亜共栄圏」とアジア

台湾、朝鮮、タイ、フィリピン、沖縄

■アジアから見た8・15

フィリピン、シンガポール、マレーシアほか

■教科書から侵略の文字が…

日本の教科書・アジアの教科書



ニホン語を強いられたアジアの人たち
▲「アジアワヒトツ」は侵略のスローガン
(日本占領下のフィリピン)

No.13

1983.1

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

8・15とアジア

37年目の8月15日は、新たな侵略へのふみ台と、なるだろうか。これまで8月15日は「終戦記念日」でしかなかった。だが、1982年、8月15日は「戦没者を追悼し平和を祈念する日」となった。この日の実現をめざして「英霊にこたえる会」は積極的働きかけを行なった。

さらに、この日を制定するにあたり、政府の諮問を受けた江藤淳、曾野綾子ら6人で構成された戦没者追悼の日に関する懇談会が報告書を政府に出し「日」の制定を提言した。

しかし、この報告書は追悼の対象を310万の同胞のみとしており、同じ「大東亜戦争」で犠牲となった1800万人とも2000万人ともいわれるアジアの人々についてはまったく触れていない。

台湾、朝鮮を南進の足がかりとして、「八紘一宇」のスローガンのもと、アジア統一をめざし日本が侵略していった国々でどれだけの人々が殺されただろう。現地調達を基本とする日本軍隊の占領で、アジアの国々では米、衣類ばかりでなく、人間の労働力も強制的に奪われていった。また、占領地では女性を強姦することは当然のことであつたし、従軍慰安婦として多くのアジアの女性が戦場に連れていかれた。

本来豊かな自然に恵まれているはずのアジアの民衆は飢えに苦しみ、着る物に困り、ゴムやバナナの皮をまとった。戦後、連合軍は俘虜虐待についての厳しい責任追求を行なった。しかし、アジアの民衆が被った被害についての責任は不問に付されて今日にいたっている。アジアの民衆を殺した日本の戦争責任は今だに消えてはいない。ロームシャ、トッコー、テンノウヘイカ、そういった言葉が今なおアジアの人々の口にのぼる。

今、アジア諸国から「歴史をねじ曲げる日本の教科書」という批判の声が上がっているように、日本の教科書から「侵略」の文字が消されようとし、戦場となった沖縄で800人の人々が日本軍に虐殺された事実すら消そうとする動きがおきた。

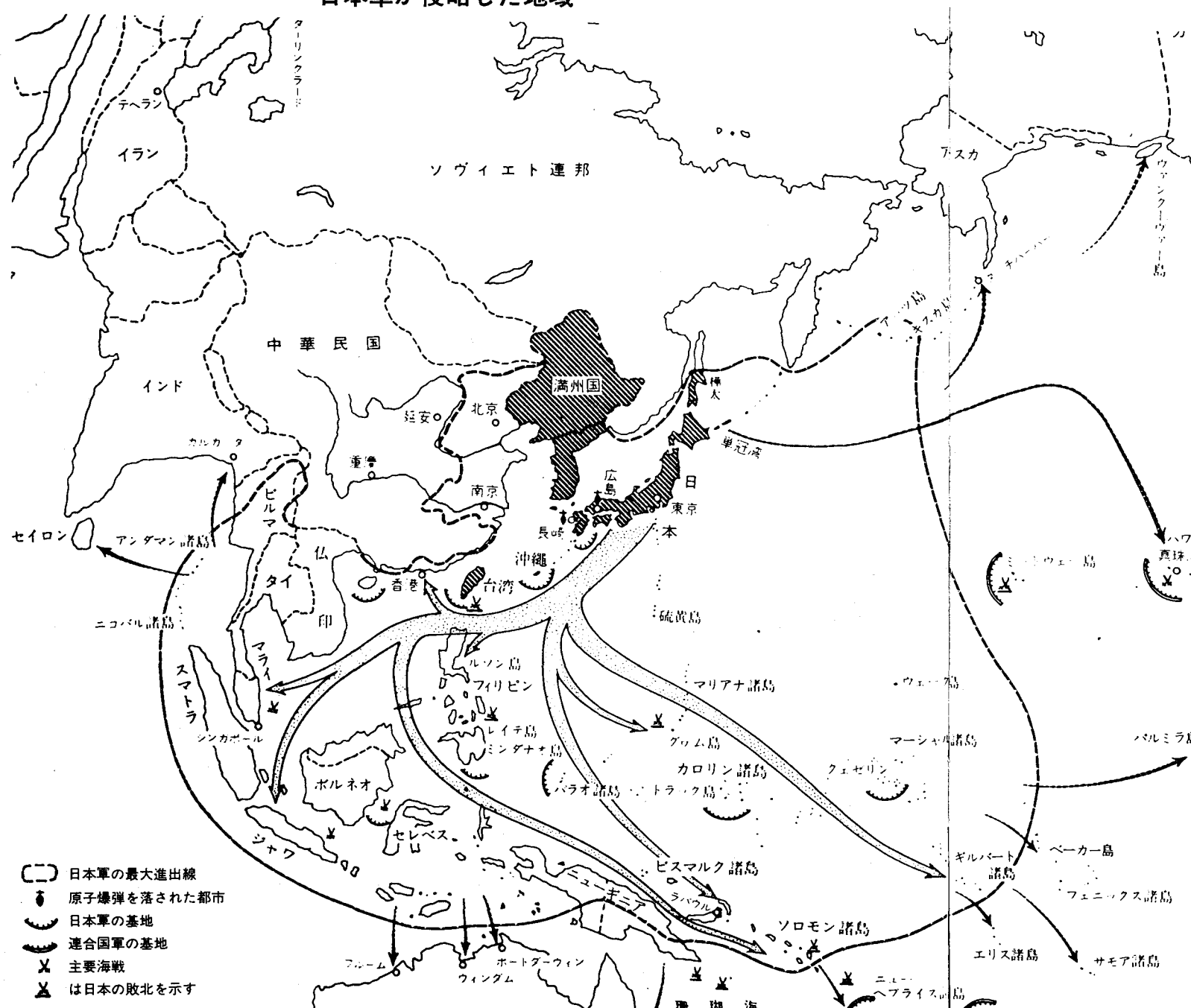
私たちは歴史の中で日本軍が何をしたのかほとんど学ぶこともないまま、今また、買春観光や企業進出とアジアに出かける。またアメリカの配下のもと、アジアでの軍事一体化を押し進めている日本に対し、かつての「大東亜共栄圏」の国々から、その軍備増強に危惧の声があがっている。

私たちは、アジアにおける侵略の実態を明らかにすることなしに、あの戦争が何であったのかを把握することはできない。アジアの被害を抜きにして8月15日を語ることはできない。戦争とは人を殺しつくすことである。今こそ、戦争への道を歩まないために、アジアの人々と共に連帯し立ち上がろうではないか。

1983年1月

アジアの女たちの会

日本軍が侵略した地域



「日本の歴史・7」(ほるぷ出版)

「大東亜共栄圏」とアジア

内海愛子

あるパーティー

十一月三日は「文化の日」である。戦前の教育を受けた人々には、この日は「明治節」として記憶されている。一九四三（昭一八）年のこの日、東京永田町の東条首相官邸は、華やいだ雰囲気になり、満ちあふれていた。七カ国の国旗をめぐらせ、花が色どられた食堂には、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島撤退、アッツ島玉砕と続く敗戦の重くするしきはない。明日から始まる「大東亜会議」に出席する各国代表が一堂に会したパーティーは、ビルマのバーモウ首相の言葉によると東条首相を中心に、「きわめて感動的な雰囲気をつくり出していった」という。東条は次々と到着する各国首脳の手を握り、お互いの紹介を精力的に行なっていた。その時、大東亜各国を指導する帝国の首相として東条は得意の絶頂にあったことだろう。

中国国民政府行政院院長汪精衛、

満州国総理張景惠、タイのワン・ワイタヤコン殿下、フィリピンのラウル・大統領、ビルマのバーモウ首相そして「自由インド仮政府」の首相チャンドラ・ボース。これらの出席者は、いずれも日本の「大東亜共栄圏」のなかにつくられた「カイライ政府」の指導者たちである。ボースは東条にむかつてこのパーティーは「ひとつの家族のパーティーだ」と言っていたという。名言である。まさに明日から始まる「大東亜会議」は、「大日本帝国」を家長とす「家」に組み込まれた六カ国の「家族会議」をめざしていたのである。

日本が「大東亜共栄圏」建設の名の下に、南方へと侵略の歩をすすめた時、「八紘一宇」をスローガンとしていた。「八紘あめのした」をおおいて宇（い）とせん」という意味だが、いま風にいえば「世界は一つ、人類はみな兄弟」というあの笹川良一のスローガンになる。この中心になるのが「万世一系」の天皇であり、

その天皇をいただく「神国日本」というのである。

東条にとつて、「大東亜会議」は日本の侵略を合理化するためにも、是非とも成功させなければならぬ。前夜祭のパーティーで、不愛想な軍人東条が、精一杯の愛想をふりまいたであろうことは容易に想像できる。この席に参席した各国の首脳は、各々の思いと計算を胸に、「大東亜共栄圏」というタイトルの芝居を、共に演じる役者である。東条は全権力を掌握する「座長」として責任があつたのである。

アジアの現実

十一月五、六日の二日間、「大東亜会議」が帝国議事堂で開かれた。会議の冒頭で、東条は「英米のいう世界平和とは、すなわちアジアにおける植民地搾取の永続化、それによる利己的秩序の維持にほかならない」と演説、日本こそその解放者であり、独立を援助する者だと強調した。

南方資源の確保と援蒋ルート（中国で抗日戦線を築き日本軍に執拗に抵抗する蒋介石への連合国による援助物資の輸送ルート）切断を目的としたアジア侵略が見事に「解放者」にすりかわっている。欧米の支配にとつて代る日本のアジア支配が「鉄鎖の民を解放する」正義の支配とでもいうのだろうか。このまやかさは、侵略されたアジアの国々に宣伝されただけでなく、日本の国民を戦争へ動員する手段としても十二分に活用された。日本軍に侵略されたアジアの国々では、食糧・人的資源の強制収奪や徴用が行なわれ、虐殺、強姦、強奪も各地で起きていた。日本が解放者などではなく新たな支配者であることを、アジアの人々は被支配の体験を通して早々と見抜いていた。だが、軍の宣伝に踊らされた日本人が戦争の真の姿を知ったのは敗戦後である。今なお、アジアの人々の口には「見よ東海の空あけて」で始まる「愛国行進曲」の歌詞二番に

軍の宣伝するあの戦争の姿がはつきり描かれている。

「起て一系の大君を 光と永久に載きて 臣民われら皆共に 御稜威に副わん大使命 征け八紘を宇となし 四海の人を導きて 正しき平和うち建てん 理想は花と咲き薫る」全世界を、大君をいただく大日本の傘の下におさめ、「正しき平和」をつくり出そう、それが天皇の威光にかなうための日本人の大きな使命であるというのである。今ふり返ってみると、「何と馬鹿氣たことを」と誰しも考えるだろう。

だが、多くの日本人が、こんな歌詞に何ら疑問を抱かなかつたほど、軍の言論・思想統制は徹底していた。また、アジアが欧米列強の支配の下に呻吟していたこともまぎれもない事実である。



今のベトナム（仏領印度と呼ばれていた）は、フランスに、マレーシマ、ビルマ、インド、シンガポールはイギリスに、インドネシア（蘭領印度と呼ばれていた）はオランダにそしてフィリピンはアメリカにと、アジアは欧米の植民地として分割統治されていた。独立を求める声は圧殺され、列強の支配は「万年統治」を誇るゆるぎないもののようにアジアの民衆には映っていた。香港のスタンレー刑務所、シンガポールのチャンギ刑務所の偉容は苛酷なイギリス支配を今に伝えている。

中国侵略の膠着状態を南方侵略によつて打開しようと、軍がアジアに目をむけた時、そこには欧米列強によつてズタズタに分断され、喰いあられされた悲惨なアジアの現実があつた。

南進する日本

重慶に退いて日本への抵抗を続ける蒋介石政権に、米英らは物資援助を続けていた。中国戦線の泥沼を脱するためにも、日本はこの援蒋ルートを何とか切断したかった。だが、援蒋ルートを断つためにはイギリスとの対決は避けられない。一九四〇（昭一五）年六月、日本の外務省はビルマと香港経由の援蒋物資輸送停止を駐日イギリス大使に申し入れている。

仏印ルートを断絶するために監視員をハノイに送つたりもしている。こうして自らが引き起した中国侵略を貫徹させるために、日本は蒋介石政権を支援する列強との対決へとひきずりこまれていったのである。

一九四〇（昭一五）年七月二十八日から三日間、日本軍は南部仏印へ兵を進めた。アメリカは日本軍のこの行動に対して対日石油輸出全面停止を発表、これは石油の八〇％をアメリカに依存していた当時の日本には衝撃的な出来事だった。アメリカとの戦争状態は何か回避すべく日米交渉を続行していたのである。しかし、中国大陸からの日本軍の撤収、蒋介石政権支持、満州国の否認を主張するアメリカの要求は、日本軍には絶対に受け入れられないものだった。

「英霊」の貴い血で贖った「満州」の地を、むさむさとあけわたすことなどとうてい出来ないことだと思われていたのである。「満州」をあけわたし、中国から撤兵しない限り、米英との戦争は避けられないとの判断が次第に日本軍のなかで固められていく。A B C D包囲網のなかで、日本は「自存自衛のために戦争も辞せず」との選択に傾いていった。（Aはアメリカ、Bはイギリス、Cは中国、Dはオランダを指す）

日本軍の中国大陸への侵略が招いたこの膠着状態を、撤兵ではなくさらなる侵略で解決することを明らかにしたのが一九四一（昭一六）年九月六日の「御前会議」である。ここには一〇月下旬を目途として対米、英、蘭との戦争準備を完了することが明記されている。

対米戦争も辞せずと大見えを切つたものの、日本は石油をはじめとする主要資源をアメリカに依存していた。戦争など出来る状態ではない。アメリカにかわる資源の供給先として、日本軍が熱いまなざしを向けたのが蘭印（今のインドネシア）である。蘭印には石油もある。ボーキサイトもゴムもある。蘭印さえ押えれば何とか戦争は出来る。「自存自衛」の対英米戦争は資源確保の南進によつてのみ可能となると軍は、ふんだのである。中国侵略は、今や南方の軍事侵略へと拡大していかざるをえなくなった。その南方各地は、欧米列強の植民地統治下にあつた。その地を欧米にかわつて新たに日本が占領し、日本の鉄鎖につなぎとめようというのである。

「大東亜戦争」の開始

ハワイの真珠湾奇襲で始まった戦争を、日本は「大東亜戦争」と称することに決定した。これは「大東亜新秩序建設を目的とする戦争になる

ことを意味する」という。

この戦争は「支那撤兵」を求められた日本が「自存自衛」と称して米英にしかけた戦いではなかったのか。「東亜解放」は戦争遂行の方弁として利用されたにすぎない。だが真珠湾奇襲の成功、フィリピン、マレー半島占領、シンガポール陥落、スマトラ・ジャワ占領と思いがけない緒戦の勝利の連続に、軍も政府も「大東亜共栄圏」の確立の幻想を本気で抱いたようだ。東条首相は一九四二年一月に再開された第七九帝国議会の施政演説で、大東亜共栄圏確立の方針を執拗にくり返した。そして日本の南進と占領は「植民地解放」を大義名分として打出すことによつて新たな局面をつくり出すことになった。国民を「新たに興す大アジア」の大義のために総動員していったことはもちろん、植民地からの解放を求めるアジアの指導者のなかからも呼応する動きが生まれた。

インド独立を求めるチャンドラ・ボース、蘭印のスカルノ、ビルマのバーモウ、アジアの独立運動の闘士たちは日本の武力をテコにイギリス、オランダの轡から脱出しようと計った。永年の欧米帝国主義列強に搾取しつくされたアジアの民衆が、自分たちと同じ肌をした日本人に解放者の姿を見たとしても不思議ではない。

一時的ではあったが、破竹の勢いで進む日本軍の南進は、アジア解放の幻想を、日本人にもアジアの民衆にも与えたのである。独立運動の闘士たちは、この機会を生かして独立を達成しようと策を練った。民衆は初めて知った「解放」の喜びに民族独立の魂をはぐくんできた。日本の南進は、永年の欧米アジア支配の構造を流動化させたのである。だが、日本が朝鮮・台湾を中国大陸や南進の基地として収奪していることを考えれば、アジアの指導者たちにも日本の占領の意図が見えたはずだ。南進する日本軍のなかに植民地の台湾人・朝鮮人兵士もいた。日本の占領によつて「人的資源の活用の名のもとに強制徴用、徴兵がありうることもわかったはずだ。冷静に考えれば、日本軍の南進は、対米英との「自存自衛」の戦争を遂行するための人的・物的資源の調達を目的とする新たな植民地支配であることもはっきりしてはいたはずである。

だが、「アジア解放」が単なるスローガンにすぎないとしても、日本に賭けた独立運動家たちもいた。それほど列強の支配はアジアの上に重くのしかかっていたのである。とりあえず、日本軍の力を利用して欧米を追い出し、やがて日本を追い出して独立をかちとる。日本はその過渡

期の支配者として利用する。スカルノにもボースにも、日本に協力しながら、胸中には燃えあがる烈烈たる思いがあったことだろう。いつの日か、この手で民族の独立を」との思いが。

日本軍の南進の意図を見抜き、抗日運動に起ち上った人々も多い。日本の占領中に弾圧されながらも地下運動をねばり強く続けてきた抗日独立運動の闘士たち。かれらこそ独立を担った闘士として真に称えられなければならない。ベトナムのホー・チミン、フィリピンのフクバラ・ハップ、インドネシアのタン・マラカ。だが、歴史の女神は、常に闘う人々に微笑みかけるとは限らない。妥協なき闘いには弾圧もまた厳しい。タン・マラカが日本占領中のジャワで、地下にもぐらざるをえなかったのに対し、スカルノは、日本軍に協力しながら時期を待った。そして、日本の敗戦で政治の表舞台に躍り出たのは、スカルノたちだった。独立をめざしながらも日本軍とどのような関係を維持するのか、抗日か日本軍への協力か。アジアの独立運動指導者の内部では、日本軍政を軸に、はげしい緊張と独立への胎動が生まれていた。「解放者」を気どる日本人に、アジアの地下に流れる独立への底流がどれだけ見えていたのだろうか。

うか。

「大東亜共同宣言」

「大東亜会議」は六日、「共同宣言」を満場一致で採択して幕を閉じた。宣言は五つの項目からなっているが、その前文は東条首相の得意満面の笑みが見えてきそうなほど、空虚な美辞で飾られている。

「抑々世界各国が各其の所を得相倚り相扶けて万邦共栄の榮を偕にするは世界平和確立の根本要義なり」然るに米英は自国の繁榮の爲には他国家他民族を抑圧し特に大東亜に對しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亜隷屬化の野望を逞うし遂には大東亜の安定を根柢より覆さんとせり大東亜戦争の原因茲に存す

大東亜各国協同して大東亜を米英の桎梏より解放して其の自存自衛を全うし左の綱領に基き大東亜を建設し以て世界平和の確立に寄与せんことを期す

南進が「大東亜の解放者」とすりかわり、大東亜戦争が米英の侵略搾取への戦いと正当化されている。この宣言には日本の侵略が見事に隠されている。汪精衛や張景惠の演説は他の出席者のなかでも特に空々しく、日本のカイライ国家の宿命とも言うべき阿諛追従にみちたものだったという。

美しい言葉の裏にある日本の真意を露呈したのが、会議終了後のレセプション会場だった。大東亜会館の宴会場には、モザイクスタイルで大東亜共栄圏の地図が描かれていた。しかも日本の勢力範囲は赤タイルで浮きあがるようになっていたという。

「大東亜各国協同して」などというが、実態は属国、すなわち日本の植民地であることはこのモザイク地図が何よりも雄弁に物語っていた。赤タイルに色どられた自国の姿を目にした「大東亜各国」の指導者は何を考えたのだろうか。「大東亜共栄圏」は、どんな美辞で飾られようとも、米英にかわって、アジアを日本の植民地統治下におくことを意味する。

フィリピンやビルマのように時には独立を認めている場合もあるが、それは日本製独立国にすぎないことは当事者が何よりも知っていたはずである。

虚構の「大東亜共栄圏」は一九四五（昭和二十年八月一日）をもつてついえ去った。日本の敗戦後、欧米帝国主義列強は再びアジアへ侵略の歩を進めた。だが、日本占領による支配の流動化は、アジアに新しい動きを生み出していた。欧米の再侵略に武器をとって起ち上がる国さえあった。アジアの民衆は、欧米植民地支配の下に再び組み込まれることを拒否して戦いに参加していった。独立を求めて幾多の人々がその熱い血を大地

に流したことだろうか。独立運動で斃れた先達を悼む人々の声を、私たちは今なおアジアの各地で耳にする。

戦後アジアの独立は、まぎれもなくアジアの民衆が自らの手で克ちとったものである。だが、東条の「大東亜共栄圏」の亡霊は、今なお日本人の間に根強く残っている。そして、日本が再びアジアへ侵略——経済という名の侵略——を開始した現在、かつての大義名分は「援助」や「協力」の名にかわっている。「大東亜共栄圏」の芝居にカイライ政府の指導者が演じた役割を、今またアジアの独裁政権の指導者が演じている。そのタイトルは「開発」や「近代化」と変わっているが……。

台湾における

戦時動員体制づくりと女たち

とみざわよしこ

日本の「近代化」と「膨脹政策」とは一心同体だった。日本の侵略支配の歴史は、沖縄を領有し、台湾を植民地統治することから始まった。台湾統治五〇年の間、台湾の中国人、高山族（以下両者含めて台湾人という）に対する社会構造の破壊、経済的略奪は、戦争の拡大に従い、民族の文化、伝統を抹殺するまでいきつ

いた。一九三〇年代から推進された皇民化政策がそれである。言語をうばい、徹底した精神の服従を日本民族優位のもとに強いていった。この統治政策はどのような方法で行なわれ、そしてその中で女たちはどう翻弄されて生きたのか。限られた資料をもとに追ってみた。

一、台湾の南進基地化

日本による台湾侵略の歴史は、近代史の曙、「近代化」の方策も定まっていなかった一八七四年（明治七年）の台湾出兵に始まる。三年前の沖縄島民の殺害を根拠としたその出兵は沖縄を強行に日本国土に組み入れる過程と結びつき台湾東部の領有をは

大東亜共同宣言

（大東亜会議・一九四三年）

- 一、大東亜各国は協同して大東亜の安定を確保道義に基き共存共栄の秩序を建設す。
- 一、大東亜各国は相互に自主独立を尊重し互助救済の実を挙げ大東亜の親和を確立す。
- 一、大東亜各国は相互に其の伝統を尊重し各民族の創造性を伸暢し大東亜の文化を昇揚す。
- 一、大東亜各国は互恵の下緊密に提携し其の経済発展を固り大東亜の繁榮を増進す。
- 一、大東亜各国は万邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廃し普く文化を交流し進んで資源を開放し以て世界の進軍に貢献す。

かったものだった。その後、日清戦争の戦利品として正当化された強奪によつて台湾が日本軍政下におかれると、民衆に対する徹底武力弾圧の行為は「植民」と「開化」のための必要なプロセスとしてははかることなくされた。

第一次大戦が始まる一九一四年までの台湾統治は「民生の充実と安定」が課題とされた。その間は武力支配のもとで、戸口調査、土地整理事業、旧慣行調査、そして米・砂糖業の育成を名目に日本から資本を入れて台湾人を糖業労働者へとかえてゆく農業収奪中心の政策だった。日本支配



台湾の女性むけに出版された本

極めて貧弱であるが、統治以後二倍となり、増殖力がめざましいので将来性がある」と統治者によって分析された六〇〇万の中国人と四〇〇万の日本人、一六万の高山族をいかに活用するか。そして遅れた、未開発の資源である女性をどのように利用するかを、この頃統治者は論じている。国防要員と生産要員として、どうしてもこの人的資源は命令に服従し、生命を捨てることに諾とする人間でなければならぬ。では、いかにそういう人間をつくるか。この工作のために行なわれたのが皇民化運動である。

二、皇民奉公運動の展開

一九四一年、日中戦争から大太平洋戦争へと戦域を拡大させたこの年に、『皇民奉公会』が発会し、その直後には志願兵制の実施が決められている。この皇民奉公運動はそれまでの皇民化運動を徹底させるために、全島へ及ぶ機構を末端まではりめぐらせたものだった。この運動を日本内地で行なわれている大政翼賛運動の台湾版であると規定しながらも、台湾における運動の特色として、内・台・高・三兄弟（内地人・日本人、台湾人・中国人、高砂（高山）族）の融和による『台湾一家』の建設が強調された。運動の三大目標には、訓練、

増産、銃後生活がかかげられた。この皇民化運動が、朝鮮、満州におけるそれと比較してまさっている台湾統治者に自負させたものは、組織化と、台湾人を登用した自発性の鼓舞だった。

「朝鮮『国民総力聯盟』は愛国班に至るまで組織整備し、然も行政と二位一体となっている点、相共に外地型機構の特質を顕示しているのであって、その限りに於て恵まれたる地盤を持つわけであるが、機構が行政に偏り気味なのは国民運動の観点に立つ限り未しの感が深い。……満州帝国に於ける国民隣保組織は直ちに協和会機構となりえない。……かくして、皇奉運動の成功は組織化の完備、特に末端組織の強き把握が有力な一因をなしていると考えて宜いと思ふ。」（『皇民奉公運動の進展』「台湾経済年報」昭和十九年版）

末端組織としてつくられた奉公班（全島六万八千三百四）を単位として、日常的な日本語の使用、家々へ神棚をまつらせ、中国服、音楽、芝居まで禁じ、中国人として、あるいは高山族としての民族意識を捨てるよう強要した。村々の指導者たち（保甲壮丁団幹部）への教材として出版した『台湾保甲皇民化読本』（昭和十六年）の中では、朝鮮人をひきあいにし出して競わせるかのように、台湾人

の皇民化に対する熱意が足りないことを叱責している。「少しでも支那が恋しいように思われる気分がおきる」ようではいくら日本人のまねをしても皇民化といえないと述べ、「今は支那とは路傍の石ほどの関係もないのである」から、心から「自分たちは立派な日本人だ、日本帝国の為に忠誠を尽してみせるのだ」という考えを抱かなければならないと説いている。

またこの本の中では、「若し日本が無かったら、東洋は英米の植民地」であるとし、中国人、蒋介石、中国共産党に対する誹謗「こういう国が隣りにいるために日本はいつも迷惑

閣議決定「南方政策に於ける台湾の地位に関する件」

- 一、台湾は其の地理的其の他の特長を勘案し帝国の南方に於ける前進基地の一として之を活用す。
- 二、之に伴い台湾総督府は中央の定むる南方政策に順応し必要なる島内諸施設及事業を整備すると共に南方諸地方に於ける帝国出先官憲の事務に關し所要の協力を爲す。
- 三、前項の施設及事業整備並に協力に關しては軍事上の要請、台湾統治上の必要台湾の地位、資源、経験等の活用、關係各庁との關係の調整其の他を総合的に考察し之の具現を図る。

する」と、中国への出兵を正当な行為として記述している。事実にもとづく正しい情報がとざされている中で、台湾人のある者たちは、その中国語力をもって、大陸へも動員されつたり同胞と戦うことを強いられ、兵士として、徴用しなかったのは、直接台湾人に銃を持たせて寝返ることをおそれたからであった。一五年戦争で、軍夫、軍属、軍人として狩り出された台湾人は、約二〇万七千人といわれている。

南方戦域は直接、台湾人に銃を与える場の出現だった。青年層には直接的な戦力増強のための機関として、青年学校を設立、より年若い層に対しては、皇民錬成所を五千余カ所設置し、皇民教育を若者たちにほどこすことが全島にわたり徹底されていた。しかし、皇民奉公運動遂行のうえから、見すごしておくことができないのが、がんこで昏迷な層とみられていた女性たちだった。

三、動員される女たち

いくら学校や職場組織で日本語を強用しても、家庭にいて旧態依然としている女たちによって、皇民化がはばまれていくと、しばしば統治者がなげいている。この女の動員のためにとられた方策の中で、日本人の女が担った責任と役割は大きい。

皇民奉公会の組織の中で、運動の中核として位地づけられたものに、桔梗俱樂部がある。未婚有識女性の結合体として、六七団、三九八三人の女が参加し、女たちへの働きかけ、宣伝に効果をあげたという。また、奉公会の中の文化団体として位置づけられた大日本婦人会台湾本部（会員、一二万八千名）愛国婦人会と国防婦人会を統合）では、一九〇四年以降、一貫して軍事後援事業の活動をしてきた実績にもとづいて、授産活動や神棚設置を推進する担い手となった。

東南アジア一帯への戦域が拡大するにしたがい、台湾は兵站補給基地と自給自足、工業化が使命となり、男が兵員、東南アジア支配の工作要員として供出させられてゆくと、従来、女に押しつけられていた役割に変更改せられた。男のいなくなつた生産労働の場を補完し、新たな軍需産業へ入り、かつ銃後の家を支える担い手となることである。農業労働に対しては、女子勤勞奉仕隊や部落ごとの女子増産隊を組織し、職場では、男子青年の就労を禁止し、女子による代替が実施された。一九四四年に一七職種を男子不適當と指定し、これによって二万五千人の若い男子にかわって女が就労したという。その職種とそれぞれの転進者数は下

表のとおりである。

女たちは突如としてひろげられたこれらの職場を前にしてどんな感慨を持ったのだろうか。また、従来の女の限られた就労の場であったお手伝い（家事使用人）は一世帯で二人以上使用する場合に認可を要することとして人数を制限し、芸妓・女給に対しては転業をはかった。

良妻賢母をよしとしていた女子教育の内容も、高等女学校では実務的、事務的訓練の強化がはかられ、家政女学校は女子商業学校へと転換された。家の内にある服従から、生産の第一線で働くように求められることが、新たな奉仕でしかなくとも、それが公認された場であるから一層、女たちの中には必死で自己変革に努めようとする者もあらわれる。台北州女子挺身隊員として一九四一年に内地農業視察団に加わった台湾の少女が伊勢神宮、宮城、明治神宮、靖

国神社など参拝づくめのコースの最後に立寄った農村女子青年団との交流を体験して得た感想を次のように述べている。

「農村を視察して台湾に帰ったら是非実行したいと感じた点を申し上げます。家庭を守り、家庭で働くのは、女の仕事であり外で働くのは、男の仕事であると考えていた私でした。けれども此度内地の女の方が真剣に働いていられる様子を見て台湾の女性は、余りに怠け過ぎる、もっとも真剣に真面目に、男と同じ様に、いいえ或時は、男に負けない様に働かなければならない。働かなければ申訳がないと思いました。」（『台湾農會報』昭和十六年）

この少女の発言を奴隷のことばと聞きながすことはできない。ここには植民地下での日本の女と台湾の女との位置が語られている。台湾の女にとって、日本の女はお手本として

男子不適當の17職種 (1944年)

事務補助者	4,755名
現金出納係	482名
給仕受付係	4,885名
物品販売の店員・売り	4,231名
行商、呼売	2,347名
外交員、注文取	586名
集金人	258名
電話交換手	96名
出改札係	203名
車掌	400名
踏切手	26名
昇降機運転係	10名
番頭客引	482名
給仕人	552名
料理人	1,390名
理髪師	2,106名
携帯品預り係	15名
案内係	
足下番	

（出所）『台湾経済年報 一昭和19年版』126頁

あおく存在だったのである。日本の女たちは植民地台湾で、よきお手本であろうと努めた。この頃、とりわけ気丈な女たちの「善行美談」が紙面で紹介されている。

四、日本統治の歴史と現在

台湾の女にもになわされ、子供たちをもまきこみ、建設するとされた東亜新秩序の理想は、日本にとって実は台湾でつちかった植民地支配の経験を活用し、東南アジア一帯を勢力下に置くことでしかなかった。一九四三年、東京で開かれた大東亜会議で美辞で飾られた共同宣言が発表された同じ年に、台湾総督府文教局長西村は雑誌のインタビューに答えて次のように発言している。

「編集部——国語普及の問題ですが、南方の占領地域では日本語の普及は相当急速度ですね。台湾の国語普及の方法などが大部参考になっていると思われませんが、南方のやり方をみていると何か実用主義が第一という感じで、日本精神の浸透などはそのあとというようにみうけられませんが……」

西村——そりやそうだよ。南方と台湾とは政治的意味が全然ちがう、ここは日本だからね。日本人になるために国語をおぼえさせるのであって、それも言葉だけではダメなんだ。精神をしつかりつぎこまなきゃね。そこに台湾の国語普及の苦心があるわけだ。そこへゆくと南方では簡単に言えば車夫の日本語ということに

なるね、必要からきているのだから。朝鮮の一分何分などにくらべて台湾の国語普及率はすばらしいものだよ。君たちも地方へ出張していて決して不自由を感じないだろう。」「台湾時報」一九四三年四月号

日本人のある者たちは今でも朝鮮の植民統治には手こずったが、台湾支配は成功したと胸をはる。同化政策にもとづき民族的主体を破壊しつくす方法に大きな違いがあったわけではなかった。十四年早い時期に武力弾圧をうけた台湾人がより支配に従順であったという理由などない。しかし、台湾にとって、日本支配のため、中国本土から隔絶されてしまった歴史はあまりにも重い。日本の敗戦によってえた解放の契機は、台

湾人自らが決定してゆく自由を手に入れぬまま、すぐに国民党軍の支配にとつてかわった。精神的屈従を日々強要した支配のシンボルだった神社は、日本の敗戦を知った台湾人民衆によって破壊された。

しかし、この抑圧をはねのけるエネルギーの高まりを組織する道はふさがれてしまった。その状態ののっかって、今もまた日本は、台湾を経済的従属関係のもとにおいている。私たちは戦前戦後を通じて日本がつくった台湾との関係をみええることなしに、対等なアジアのかかわり方を考えてゆくことはできないだろう。



朝鮮支配に荷担した日本の女たち

斉藤 久美子

終戦間近、朝鮮には五〇万にのぼる日本の女たちが居たといわれる。これだけの数の日本の女たちが居たにもかかわらず、当時の朝鮮総督府の資料にはこの女たちの存在がスッポリと抜けおちている。

暴虐の限りをつくした日帝支配下の朝鮮で日本の女たちの果たした役割は一体何だったのだろうか。

最近になって、やつと侵略戦争における女たちの加害者としての側面を、女自らの手で掘り起こす作業が始められ、軍国主義を担っていた愛国婦人会、大日本国防婦人会などの果たした加害性の具体的事業が明らかにされつつある。

「皇国臣民化」を担う女たち

すでに、日本「内地」では様々な婦人会設立、軍人出征時の入退営歓迎、軍人遺家族・傷病兵慰問、千人針、慰問袋・慰問状の贈呈・発送などの軍事後援・慰問や、報国運動、勤労奉仕、節約運動などを全国規模で行なっていた。

日本婦人は一日も安穩にはいられませんが、出征兵士が安心して戦争をしていられるように、兵士たちの後援と銃後をしつかり務めることが我々婦人の与えられた責務であり、そのためにも婦人の団結が必要である」として、その活動精神は貫かれていた。それをそのまま朝鮮に当てはめ、婦人会本部・支部を全道に設置して入り込んでいった。

朝鮮の儒教における男尊女卑の因襲は、朝鮮総督府に利用された。当時の朝鮮の女たちの識字率は、九・

五%にもおよんでいた。

そこで、日本の女たちは女学校や夜学会などを作って、日本の修身「婦徳」を、朝礼時、学習時、登校下校時、休憩時、食事時といったあらゆる場で暗唱させたり、礼法、日本の風俗・習慣、愛国歌(君が代)を教えるなど、教育刺語の実践で皇国婦人としての役目を悟らせていく。子どもたちにも同じように、日本精神の教育には、皇民科・戦時家事科・仕奉科などの学科を設けて、その実践は、日本語使用から始められるべき——日本語を教えなければ話も通じないし、教育することも出来ない——として、朝鮮人に日本語を教える「国語講習会」などを開いたりして普及させた。「日韓併合」「内鮮一体」「八紘一宇」の歴史的必要性を教えたのだ。

学校教育だけではなく、朝鮮の女たちに「私共婦人の手で内鮮一体の完成をおたすけしましょう」という標語などによって、家庭生活のすべてを「天皇陛下の御為に」の一念で律することを女たちの義務として、そのような生活態度こそが国家に奉仕する道であると指導した。

教育の場では、学生たちを「治安任務」に忠実な日本人教師たちが監視をし、生活の場では、老人や女たちを日本の総動員運動の最末端の実

践機構としての愛国班・班常会と共に婦人会などが、日常生活全般を監視していたのである。

総動員を担った女たち

朝鮮総督府の政策自体も、徹底的に朝鮮人を日本人(人)化して「報国隊」や「徴用」「徴兵」「学徒兵」など強制的に動員された朝鮮人を、天皇のために一命を捧げる人間に仕立てあげることにあった。このため、「国民精神総動員」運動(一九三八年)をおこし、安心して戦争に動員・利用できるように強行していった。

その機構は種々あるが、朝鮮各地に神宮や神社を建てて参拝を強要したり、神棚を各家庭に強制的に置かせて朝夕礼拝させたり、日本の国旗掲揚、毎朝の宮城遙拝、正午の黙とう、国民服(色服)の着用などを強要し、「皇国臣民の誓詞」をすべての朝鮮人に朗読させたりした。



朝鮮にも婦人会を組織し、千人針活動に朝鮮女性を動員した。

この政策を受けて日本の女たちは、愛国班・班常会などと共に、自らその任をもって活躍した。

朝鮮の農村などに入り込み、家事労働の合理化によって浮かした時間とエネルギーを、天皇と国家のために奉仕するための工夫をさせる「生活改善運動」「愛国ヒマ栽培運動」などをおこした。これによって、「一粒のムダもないようにしましょう」といったような宣伝ビラを各戸に配布し、朝鮮の女たちを監視・動員していた。

教育令によって完全な朝鮮語使用も禁止されると、婦人会や愛国班などは、朝鮮家庭の「生活改善運動」を更に広げていき、講演班を各道に派遣していった。

そこでは、家庭報国としての生活の基本様式(国旗掲揚・旧習打破・色服奨励)を指導していった。日本の女たちの目には、あまりにも朝鮮人が「無知と無自覚」な生活をしていると写ったようだ。それを変え、朝鮮人を救ってあげることが、朝鮮の女たちの姉としての日本の女たちの役目だとして、「自分の子を喜んで『皇軍』に差し出す母親になりましょう」などという教育・指導が、生活における「内鮮一体化」を推し進めることになった。

本戦争の後方基地としての朝鮮支配を強めるため、朝鮮総督府は更に「創氏改名」政策を打ち出すことになった。これによって完全に日本人化することをねらったのである。これでもかこれでもかと、やっきになってこれらの「皇国臣民化」政策を強力に押し進めてきた背景には、朝鮮人の反日民族解放闘争の力を恐れたということがあり、そのために治安維持法の改悪と共に朝鮮人民と独立運動者の抹殺を目的に増々露骨になっていった。

朝鮮女子学生らによる抗議デモに直面して、「朝鮮人のためになる」と信じきり「国家のため」と使命感を

皇国臣民の誓詞 其ノ一(小学生用)
一、私どもは日本帝国の臣民であります。
一、私どもは心を合わせて天皇陛下に忠義をつくします。
一、私どもは忍苦鍛錬して立派な強い国民となります。
其ノ二(青年以上)
一、我等ハ皇国臣民ナリ忠誠以テ君国ニ報ゼン
一、我等皇国臣民ハ互ニ信愛協力シ以テ団結ヲ固クセン
一、我等皇国臣民ハ忍苦鍛錬力ヲ養ヒ以テ皇道ヲ宣揚セン

朝鮮人民に皇民化教育を実施し、一九三七年十一月「皇国臣民の誓詞」が定められた。学校では毎日子どもたちに唱えさせ、三九年にはこれを書かせ、それを納めた「皇国臣民誓詞之柱」を朝鮮神宮に建てた。

持った日本の女たちも、その対応の仕方は朝鮮総督府のそれと全く同じであった。

これら朝鮮総督府の指導による女子教育方針のもと、民間組織としてのものがあり、都市・村落を問わずに入り込んで日本の女たちは大きな役割を果たしてきたのだ。

員から、日中戦争以後の本格的な動員、女子挺身隊という名の従軍慰安婦動員を推し進めるための下地をつくる役割を果たしたともいわれている。

そして今……

とは……戦争で犯した誤ちを日本の女たちは今、再び繰り返していないと言いつけるだろうか。

過去、現在のその構造を明らかにし、日本の女たちは再び同じつづをふまないために、韓国の女たちと、連帯していかなければならないのではないだろうか。



東南アジアの民衆動員

―泰緬鉄道における「ロームシャ」―

北 辺 阿 貴

出会い

バンコクからタイの西部カンチャナブリめざしてバスで四時間も走ると、映画「戦場にかける橋」で有名なクワイ川鉄橋に着いた。鉄橋には観光客と地元の人があふれていた。自転車で野菜をつんだおじさん、オートバイに乗った若者、買物かごをかかえたおばさん、カメラのボーズをとる観光客などで鉄橋の上では立ち止まることもできないほどだ。

一九八二年八月十五日、私はそのクワイ川鉄橋で八人の元泰緬鉄道のロームシャに会った。彼らは、日焼けした顔、そばおちた頬、額に深い

しわを刻み疲れたような足どりであった。その一人カムさん（インド人）はカンチャナブリ近くのバタラ村に住む。「この腕の傷は、日本軍に銃剣で刺されたものです。彼は左上腕を貫通しているケロイド状の傷跡をみせた。シンガポールに出稼ぎにきていたところ、日本軍のシンガポール占領によりタイに連れてこられ、九二日間というもののインド人、マレー人、インドネシア人などといっしょに詰めこまれた列車で泰緬鉄道建設現場に送られてきた。

同じインド人のディアさんは「強制連行のショックで自閉症になったらしい」ということで戦後三七年間

言葉をしゃべらない。

インドネシアのブーランタンさんは言う。「私はインドネシア軍にいて日本軍の捕虜となりインドネシアからタイの奥地の建設工事に連行されてきました。」

太平洋戦争中、日本軍がタイとビルマの間につくった軍事鉄道泰緬鉄道で、日本軍に連行され、使い棄てられた俘虜やロームシャが、故郷に帰るすべを知らず、あるいはタイ人と結婚して帰る機会を失くし、今なおタイに住み続けている。

鉄道工事はじまる

タイ国とビルマ国の国境をまたぎ、

な病原菌の巣でもあった。栄養失調に、マラリア、コレラ、赤痢などの伝染病を併発し、充分な医療施設、薬品などもなく、俘虜とロームシャ四万六千人が死んでいった。

「ロームシャ」の動員

泰緬鉄道建設のため動員されたマレーシア、インドネシア、タイ、ビルマ、ベトナムなどの民衆の数は今なお明らかではないが、推定表1のようではなかったかと言われている。泰緬鉄道建設になぜこんなに多くの民衆が動員されていくことになったのか、それは一九四二年の南方軍命令と、それに基づく「大本営陸軍部指示泰緬鉄道建設要綱」の文書であった。

「一、目的 ビルマに対する陸上補給路を確保し、泰緬両国間の交易交通路を確保す。（二以下略）八、労力現地労務者及俘虜を充てる」

表1 建設工事従事人員数

	従事した数	死亡者数
日本軍人及び軍属	13,000人	1,000人
ロームシャ	約100,000人	33,000人
連合軍俘虜	55,000人	13,000人

※1日最大従事者数 30,000人

広池俊雄「泰緬鉄道」読売新聞社より作成

作業は鉄道を一日も早く完成させるため、ビルマ側とタイ側、二手に分かれて同時着工し、国境付近で連結した。そのためロームシャの動員方法もタイ側とビルマ側とに分かれた。

ビルマ側

ビルマ政府バーモウ首相は、日本軍の「アジア統一の構想により隣接諸国を物理的に近づけるために泰緬鉄道をつくる」という話に賛同し、協力して労務力を提供していった。

バーモウ首相は自伝「ビルマの夜明け」の中でその想いを述べている。「ヨーロッパ帝国主義勢力によって、従来孤立化されていた歴史的誤ちをアジア統一のダイナミックな構想は正しくれると思った。久しく夢みていたものを実現してくれ、と思えたこの建設計画に魅せられた」

ロームシャは労務奉仕隊形式でビルマ政府により集められ、奉仕隊の管理もビルマ人の手によってされた。この勤労奉仕隊の働きぶりを日本軍の鉄道隊の記録で見ると、「奉仕隊の使用は、俘虜以上の効果を上げた。ビルマ人は真面目で、比較的勤勉だった」と記され、「ドバマ（万才）」とビルマ語でさげ山に入っていた」とも記されている。

タイ側

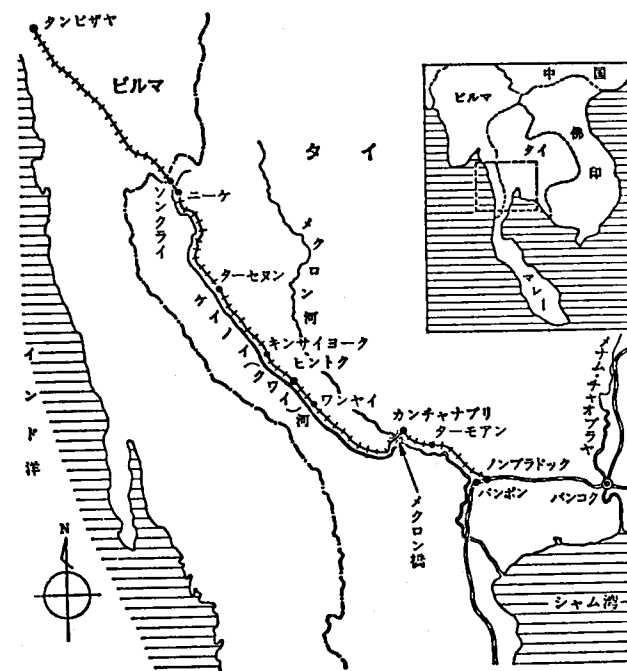
タイ側については一応契約労働の形をとった。占領地であるマレーシア、インドネシアは軍政監部の下部機構・州庁により募集され、タイ、ベトナムの独立国は民間団体に募集を依頼した。

マレー人のモハマッドさんのように銃剣をちらつかせながら村に日本軍が募集に来たので応じた人や、農場で働いていたところをいきなり連

行されてきたサミさんなど、一応契約労働ではあったがタイの動員方法は様々であったようだ。

しかし、強制連行された者はもちろん、募集に応じて来た者も異口同音に言ったのは工事条件の悪さだった。マレー人のサミさんは「はじめの三カ月は食事もろくに与えられず、ジャングルに入って木の実などを食べた」という。賃金なども労務規定により決まっていたが実際とは大違いで、労働時間も十時間が十二時間

泰緬連接鉄道路線図(全長414.916km)



あるいはそれ以上といった過酷さだった。

タイ側のロームシャの働きぶりを日本軍の記録で見ると、「タイ人は募集しても、応募者も少く、また来る者も重労働に堪へかねて、悉く逃亡した」マレー人ロームシャは、夫婦共稼ぎがかなりいたがその能力はお話にならない位低い。無統制で非能率的……と記されている。

過酷な労働

この鉄道建設に従事した人々の土工力を鉄道隊が記録したのによると、近衛工兵 一日六立方メートル
鉄道兵 一日三立方メートル
俘虜 一日三立方メートル以下
ロームシャ 一日一・五〇・五立方メートル

となっており、ロームシャは一番びりである。しかし、土工力が低いとされたロームシャではあったが、鉄道建設期間短縮命令がされた以後は大切な労働力とされていた。

作業能率をあげるため、木に布をさげておいて、一番早い者に布地をやる。また作業能率のよい者にはタバコ、アヘンなどを与えるなど、ロームシャの競争心をわきたて、作業能率を上げようとした。(広池俊雄『泰緬鉄道―戦場に残る橋』)
連合軍の俘虜として泰緬鉄道で働

かされたL・ローリングの著書『泰緬鉄道の奴隷たち』によると、「収容所には多くの現地労働者がいた。かれらは赤痢で死にかけていたが、日本軍監視兵はわれわれに、もしかれらを助けたり、食事を与えたりすれば死ななければならないと威した。日本兵の姿がみえなくなると、われわれの足許にはい寄ってきて、食物をせがんだ。朝になると多くの労働者は死んでいた」と述べられている。過酷な労働でたおれていったロームシャたちは、「米袋に入れられ谷底に捨てられたり、鉄道沿線にどんどん埋められた」とあるタイ人は語っていた。ロームシャを埋めた土まじゅうは鉄道沿線に無数にあったというが、その数さえ今だに明らかではない。

泰緬鉄道はいま

戦後、枕木の数ほど犠牲者を出した鉄道として「死の鉄路」と呼ばれ、俘虜虐待の厳しい責任追求により多くの戦犯が出た。(表2)

朝鮮などの強制連行における労働の実態などについては少しづつではあるが明らかにされつつあるにもかかわらず、東南アジアにおける労働者の連行についてはほとんど語られることがなかった。鉄道建設をはじめ、飛行場づくり、道路工事にと狩

り出されたロームシャとしての東南アジアの民衆がいたにもかかわらず、これらロームシャについては一切責任を問われることなく今にいたっている。

今、泰緬鉄道はタイ側のみ一七〇キロあまりが残っているだけで、あとは徹収され元のジャングルに返った。

鉄道沿線では、戦後故国に帰れず今だにタイに住み続けているロームシャがいるが、何人タイにいるのかはわからないが、鉄道沿線ではそんな話を聞くことがあると地元の人はいった。
日やけした顔に深いしわを寄せ、

ブーランタンさん(インドネシア人)は語った。「インドネシアには帰りたい。しかし、今から帰っても私がかつて耕していた畑はもう何もないだろう。タイには家族もいる。もし一度インドネシアに帰れば再びタイの家族のもとにはもどれないのではないか。彼らは外人税を払いながらタイに住み続けている。」

カンチャナブリのクワイ川のほとりにある戦争記念館には、日本軍による連合軍捕虜虐待の資料がある。その入口にはこう書かれている。

「Forgive But Not Forget
(許そう。だが忘れるな)」

表2 泰緬鉄道建設関係の戦犯裁判 部隊別

判決別	起訴	有罪	有罪の内訳		
			死	刑	身終
部隊別					
タイ俘虜収容所 (うち朝鮮人)	66 (30)	64 (28)	25 (9)		39 (19)
患者輸送第19班	14	11	2		9
独立混成第29旅団	6	5	3		2
マレー俘虜収容所 (うち朝鮮人)	5 (5)	5 (5)	0		5 (5)
泰国憲兵隊	4	4	0		4
独立工兵連隊	3	3	0		3
鉄道第9連隊	5	5	2		3
第4特設鉄道隊	8	6	0		6
歩兵第8連隊	2	2	0		2
鉄道第5連隊	2	1	0		1
近衛工兵連隊	1	1	0		1
工兵第二連隊	1	1	0		1
建設司令部 その他	1 2	1 2	0 0		1 2
計 (うち朝鮮人軍属)	120 (33)	111 (33)	32 (9)		79 (24)

(出所) 広池俊雄「泰緬鉄道」読売新聞社 1971
柳田正・「泰緬鉄道建設の実相と戦犯裁判」騰写刷 1954より作成

戦後世代からみたアジアへの侵略

三 浦 幸 子

「でも日本は戦争中マレーシアを占領していたのよ」

突然彼女がそう言った時、その発言がその場の話の脈絡からはずれていたにもかかわらず、私はそれを無視することができなかった。今思えばそれが私がマレーシアについて考えるきっかけになっている。

彼女はマレーシアの中国系住民でコンピュータを勉強している大学生だ。二二歳の彼女、二三歳の私、戦争を知らない二人が戦争の話をすると、一見対等な関係で話しているように見えるが、彼女と私とは決定的に違う点がある。それは彼女が学校教育の中で過去の日本軍のマレー半島占領の歴史を知り、私がそれを知らなかったことだ。これを知らないが、それならばはたしてどれだけの日本人が過去に日本軍がマレーシア・シンガポール(マレー半島のマラヤ)を侵略し、二年間も占領した事実を教わっているだろうか。戦後世代といわれ、三十数年前の戦争には

責任はないと思っていた自分が、同じ戦後世代の彼女の前では依然として加害者である現実を私は知った。

一九四二年二月シンガポール陥落直後の華僑大虐殺(五千人とも二万人以上ともいわれている)をはじめとした日本占領下のマレー半島のことを調べてみた。当時、中国大陸で日本軍と戦争状態にあった中国を祖国とする中国系住民(華人)は、もともと反日的であったことから嚴重な監視のもとにおかれた。華人は多くの家族を虐殺された上、外国人登録、華僑学校の閉鎖、日本軍の作った華僑協会への入会、軍への献金などを強制された。後に華人の経済力を必要とした日本軍は、数々の規制を緩和しつつ統治は敗戦まで続いた。

『日本と中国は一九三七年以来、戦争をしてきた。その当時からマラヤにおいて、中国人が日本人に対して抱いた敵対心が、日本軍の残忍な行為の方便とはなり得よう(しかし正当化されるものではない)』と高校の歴史教科書の中で教えられるマレー

シア、シンガポールの若者たち、片や「侵略」を「進出」と無神経にも改ざんしようとしている教育の中で教えられる日本の若者たち、両者はお互いに戦後世代でありながら、絶対に被害者と加害者という関係以外にはなれない。

経済発展をめざすマレーシア政府は日本政府に対して多額の経済援助を求めている。経済協力の美名のもとに、再び日本がマレーシアを占領下におき、そこに生活する者たちの間に、埋めることのできないき裂を拡大するようなことがあつてはならない。たとえ今、私とマレーシア人の友人の関係が、加害者と被害者だったとしても、それを認めつつ協力していくことが今の私に与えられたことだと思っている。



内海愛子 朝鮮人BC級戦犯の記録

朝鮮人BC級戦犯一四八人、うち俘虜収容所関係一三九人。大東亜共栄圏に散らばった収容所で何が起っていたのか。
二二〇〇円 300

内海愛子・村井吉敬 赤道下の朝鮮人叛乱

第二次大戦下の朝鮮人軍属の軌跡を追う。従来知られていなかった高麗独立青年党による抗日叛乱の実態を掘り起す。
一七〇〇円 250

鈴木佑司

東南アジアの危機の構造

インドネシア、マレーシアなどアジア諸国の動き、その特異な政治構造を豊富な現地体験にもとづいて解明する。
二二〇〇円 250

加藤邦彦

一視同仁の果て

台湾元軍属の境遇 日本の戦争に加担させられた軍属・高砂族・少年工等からの聞き書きと資料による丹念なルポ。
一五〇〇円 250

梶村秀樹編

朝鮮現代史の手引

近代から現代にわたる日本人の朝鮮観、朝鮮戦争、在日朝鮮人問題等の文献を紹介した本による朝鮮案内。
一九〇〇円 250



勁草書房

東京都文京区後楽二二二三
振替東京五一七五二五三

フィリピン

日本軍政にみる「侵略」

伊藤 みどり

一九四二年に日本軍がマニラを占

領する以前に、フィリピンはすでに長い植民地の歴史を持っていた。一五二〇年にマゼランがサマール島にやってきて以来、四〇〇年近くスペインの植民地と化し、一八九八年の米西戦争の結果、パリ条約でアメリカの手に渡り、日本軍占領まで四〇年あまり、アメリカの植民地だった。日本軍のフィリピン占領期間はこのようなフィリピンの植民地の歴史からみると、ほんのわずかな期間にしかすぎず、フィリピンにおける日本軍の「侵略」を語るときに、この長い植民地の歴史は無視できない。

フィリピンにおける日本軍政

日本軍がマニラを占領したのは、一九四二年（昭和一七年）一月二日であるが、その翌日には日本軍政部が設立され、一九四三年一〇月一四日、日本軍がフィリピンに独立を与えるまで続いた。日本軍がフィリピンに駐留する目的は、一月三日に出された布告によれば次の様なものだった。

〈布告〉軍政宣布二関スル件
二、日本軍ノ比島進駐ハ一二比島民衆ヲ米國ノ支配ヨリ解放シ大東亜共栄圏ノ一員トシテ比島人ノ比島ヲ建設シ其ノ繁栄ト文化ノ維持ヲ庶幾スルニ外ナラス
昭和一七年一月三日
大日本軍司令官

日本軍のフィリピン侵略の思想は端的に言えば、「大東亜共栄圏のもとにおけるフィリピン民族解放」である。その具体的政策として、ジャーナリズム・学校・教会など今までの社会制度の統制をはかる一方で、動員と統制のための新しい制度として、隣組や、カリバピ（新生フィリピン奉仕団）をつくっていった。

教育政策にみる思想統制

思想統制は「アングロサクソンの物質主義と快楽主義を根絶し、その代り、大東亜共栄圏繁栄のために東洋的美徳による質素で活気のある生活を回復すること」という目的を持って行なわれた。昭和一七年二月一

七日に出された「教育ノ根本方針ニ関スル件」という訓令に、その一端がうかがえる。そして、使用教科書の指定も行なわれ、米・英の地理、歴史、文化に関する教科書が使用禁止となった。また、男女共学の禁止、日本語教育の強制、タガログ語の普及も行なわれたが、日本軍のこのような教育政策は十分な成果を発揮できなかった。戦争勃発時の就学人口は約二〇〇万人だったが、一九四三年には、小学生は三分の一、中学生は二分の一しか学校に戻らなかった。日本の教育政策の失敗の原因の一つには、アメリカ植民地時代の教育の影響がある。アメリカは公立学校制を導入し教育を大衆化したために、アメリカの教育はフィリピン人の中に深く浸透し、日本軍占領時代にもフィリピン人はアメリカ人に深い忠誠心を示し、アメリカが再び戻ってくることを信じていたので、日本軍の教育政策もおおなりに消化された。これは、ほかの政策についてもいえることで、隣組などは、ほとんど相互監視の役割をはたさず、物資不足のときの配給網となったときはじめて活気づいた。

日本軍政のフィリピン女性観

女性に関する記述は、ほとんどないが、比島軍政監部発行の極秘文書

「比島調査報告・第二篇・統治」の中に「婦人の政治的勢力の分析」があり、日本軍政の女性政策の一端がうかがえる。この分析はまず「比島に於いて婦人が家庭乃至は社会生活に於いて極めて重要な地位を占めていることに就いては何人も異論はない。」と前置きし、フィリピンでは婦人の選挙権が一九三七年に認められたことや、カソリック教とアメリカ統治時代の女子の高等教育の普及により、婦人の社会進出も進んでいるという事実を認めながらも、当時の日本女性に強要された「統後の守り」に象徴されるような女性観にフィリピン女性をむりやりはめ込もうとして、次のように述べている。

かくして政治勢力として比島の婦人の地位は直接又は間接に没却すべからざるものであることを認めなければならぬが、今後の問題としてそれを如何に評価すべきかは自ら別問題である。国家と家庭とは異なる。政治は私事ではない。公共問題は一個の社会事業や慈善事業につぎない。比島婦人が固有社会の時代より社会的に尊重せられ、家庭に於いて重要な地位を占めて来たことは比島にとって幸福なことであつた。それは飽くまで淳風美俗として持続せらるべきである。しかし、それは飽くまで相対的のことであつて、婦人の能力の高いことは男子のそれとに比較に於けることである。家長として、主人として又公人としての比島男子に寧ろ欠陥が多過ぎるとも言へるのである。婦人の地位を低める必要は毫も存しないが、男子の責任感、判断力、活動力を高上せしむることが必要なのである。

アメリカ植民地政策の浸透

日本軍政のこのような統治政策はほとんど成功しなかったようである。原因の一つは、アメリカの植民地政策がフィリピン人の中に深く浸透していたことである。例えば、南京虐殺など日本が中国で行った残虐行為はアメリカの「反日宣伝」として、フィリピンでは詳しく報道されていた。そして、日本は大東亜共栄圏のもとでのフィリピン民族の解放を言いつつも、実際には、フィリピン人に対して残虐行為を行なっていたので、日本に対する恐怖と反感をうえつけた。さらに、長い間、西欧の植民地だったフィリピン人の中に浸透していたアジア人に対する蔑視は、これを助長した。「西欧植民地主義からのアジア民族の解放」をかかげた日本のアジア侵略は、ほかのアジア諸国では、民族解放闘争を喚起させたが、フィリピンの場合、アメリカへの植民地的従属をますます深めさせてしまった。

新植民地主義の青写真

日本軍政の侵略のもう一つの柱は経済侵略で、これは戦後の新植民地主義の青写真ともいわれるべきものである。日本軍は長期的な経済計画をいろいろとたてるが、主な計画は、



「東洋精神ニ還ヘル比島 勤勞ニイシム婦人達」(軍政公報より)

日本軍の侵略行為を告発した本

『フィリピン民衆の歴史Ⅲ』	R・コンスタンティーノ著	勁草書房
『フィリピン史物語』	アゴンシルリョ著	勁草書房
『朝鮮終戦記』	礎谷季次著	未来社
『朝鮮人強制連行・強制労働』	林えいたゐ著	現代史出版会
『朝鮮人BC級戦犯の記録』	内海愛子著	勁草書房
『朝鮮人強制連行の記録』	朴慶植著	未来社
『一視同仁の果て』	加藤邦彦著	勁草書房
『レイテ戦記Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』	大岡昇平著	新潮社
『死の鉄路 泰緬鉄道—ビルマ人労働者の記録』	リンヨン・ティツルウイン著 田辺寿夫訳	毎日新聞社
『ビルマの夜明け』	パーモウ著	太陽出版社
『インパール』	高木俊郎著	文芸春秋社
『抗命インパールⅡ』	高木俊郎著	文芸春秋社
『火の海の墓標』	後藤乾一著	時事通信社
『赤道下の朝鮮人叛乱』	内海愛子・村井吉敬著	勁草書房
『泰緬鉄道の奴隷たち』	レオ・ローリング著 永瀬隆訳	青山英語学院
『泰緬鉄道 戦場に残る橋』	広池俊雄著	読売新聞社
『戦艦武蔵の最後』	渡辺清著	朝日新聞社
『中国の日本軍』	本田勝一著	創樹社
『東条英機と天皇の時代』	保阪正康著	現代ジャーナリズム出版会

軍用の日本米だけをつくる食糧増産とアメリカ植民地時代の輸出品として重視されていた砂糖を日本の繊維産業が必要とする棉の生産に切り変える計画である。そして、それを全面的に任されたのが、戦前から、ダバオでマニラ麻の栽培をしていた太田興業会社である。一九一九年までに、ダバオには六〇ほどの日本企業が進出し、一万人の労働者がいたがマニラ麻開発に従事した日本人の七

割は沖縄県出身者で、戦争が始まると日本人移民は現地で徴用されていた。この太田興業会社の例にみられるように、戦前の企業進出が、戦中の経済侵略にそのままつながり、終戦と同時に、それは中断されたかにみえたが、戦後「賠償支払い」を契機に多くの商社や企業が進出し、日本の経済侵略は、より巧妙に行なわれている。

「天皇の軍隊」は沖縄で何をしたか!!

新里 智子

私の小学校時代というのは、丁度「復帰運動」の盛んな頃で、沖縄返還「平和行進」を「日の丸」の旗を振って迎えた記憶がある。小・中学校を通して特設授業で「過去の戦争で日本が敗戦した結果、日米安保条約によって沖縄は米占領下にあり、本土復帰は沖縄県民の要求である」と教わった。

その頃は何でも「本土なみ」と言われ、教育レベル、言語も「本土なみ」でうるさかった。戦前の教育で方言を使うと「札」(沖縄でも朝鮮と同じように方言を使うと見せしめの為、首に札をかけた)を渡されて、イヤだったと母親からよく聞かされていたが、復帰前にも学校によつてはこの制度が復活したらしい。今、思えばおかしい事である。

東京へ来た当初驚いた事がある。それは飛行機の音がほとんど聞こえないという事だ。最近の沖縄ではどうか知らないが、ジェット機の金属音で何度も授業が中断され、校舎の窓からはガラマン岳付近で、米軍のヘリコプターが垂直に降りる訓練、(69、70年というのはベトナム戦争

がエスカレートした頃で、アメリカはベトナム戦争ではじめて地中部隊の集中移動に大量のヘリコプターを使ったといわれる)や、落下傘が降りるのを景色のように見てきた私にとって、異様でもあった。民家の周辺で米軍がヘルメットや迷彩服に木の葉をくくりつけ、銃を持って演習をしている風景を見てショックを受けた事があるが、そういう姿もほとんどみられない。

「米軍」より「日本兵」が恐い

ベトナム戦争が激戦になるにつれ米軍兵の精神的荒廃から乱射事件をひきおこし、性犯罪も後をたたず、米軍恐怖症がいまだに残っている。その米軍より「日本軍の方が恐い」、「ヤマトウや信用ならん」と沖縄戦における日本軍の住民虐殺の話を父親から聞いた事がある。

沖縄戦で「天皇の軍隊」が住民に何をしたか。何故、何十年たった今も「反ヤマトウ」意識が親から子へ語りつがれているのか。

戦記「山川泰邦著より抜粋」

座間味村でも同じように集団自決が行われている。将校会議での赤松大尉の発言を用いた。「持久戦は必至である。軍としては最後の兵まで闘いたい。まず非戦闘員をいさぎよく自決させられぬ軍人は島に残ったあきらめる食糧を確保して、持久体制をととのえ、上陸軍と一戦を交えねばならぬ。事態は、この島に住むすべての人間に死を要求している」。これは、赤松大尉個人だけでなく、日本軍の方針でもあった。しかし、隊としては一発の弾を射つこともなく壕にひそみつけ、最後には降服したのである。

一般住民の犠牲が、軍隊のそれを上まわっていたのは、沖縄戦の一つの特徴だった。戦死した住民の中には、日本軍によってスパイ容疑をかけられ、虐殺された者もいる。

久米島住民虐殺の鹿山にしても、渡嘉敷村民を自決においやった赤松にしても、良心の呵責を感じるところか、「天皇の軍隊として当然のこととしたまでだ」と居直って、日本のどこかで生きている。決して許すことはできない。

六・二三沖縄戦の日

本土では八月一五日に敗戦記念日

沖縄戦は、一九四五年三月二六日米軍の慶良間列島上陸によって開始された。

で、米軍の同列島の占拠は、沖縄本島作戦を敢行するうえから不可欠だった。

三月二六日米軍は水陸両用戦車をもって阿嘉島に上陸したが、赤松隊は迎撃せず無血占領された。

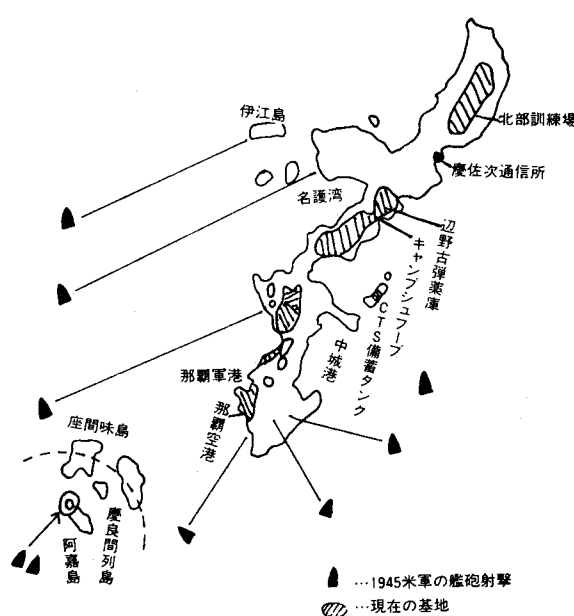
渡嘉敷村民の集団自決

沖縄戦の一つの特徴として集団自決がある。

三月二七日、赤松大尉は「住民は西山の退陣地北方の盆地に集結せよ」と命令した。

住民たちは盆地に集合することは砲下に身をさらすことになるので、

米軍の沖縄侵略と軍事基地



で色々な行事が行われているが、沖縄では六月二三日が敗戦日である。

一九四五年、六月二三日沖縄における日本軍が全面降服し、米軍が沖縄全島を占領した。これが沖縄の敗戦日である。

戦時中より米軍によって収容所に入れられていた沖縄の戦後は、収容所の柵の中から出発した。

沖縄では、住民が収容所にいられている間に、まるで、白地図に線をひくようにして、農地を膨大な軍用地として接収された。

沖縄をアジアにおける基地としてさしだすことを条件にして、日本に平和憲法が得られたといってもいいすぎではない。

沖縄戦のもつ意味は、本土決戦を一日でもひきのばすために必要以上に犠牲を強いたものであった。

天皇の軍隊によって沖縄県民が本土の盾にされ、差別ゆえに虐殺されたのだと思う。

復帰十年目の沖縄

72年復帰から一〇年目。全国米軍基地の五三%以上が沖縄にある。県面積二千二五〇平方キロのうち二五八平方キロを米軍が占め、四九ヶ所

の基地施設があり、三万一千人以上の米軍人が駐留している。

P3C、F4、F15等々が駐留し、沖縄は中東情勢と朝鮮情勢との関連で常に戦時下にある。

復帰後、土地の地籍不明を理由に米軍や自衛隊が居座りつづけている。沖縄戦で土地の境界線もわからない程沖縄をスタスタにしておきながら、それを逆に利用して居座っているのである。

ここ数年沖縄現地はベトナム戦時以上に質的に強化されて、この状態は継続されている。これを許したのには、本土の無関心と沖縄蔑視のゆえだと思う。

72年の沖縄返還とは、沖縄県民の意志をふみにじり、施政権だけが日本の政府にかえられた。アメリカの軍事面でのかたがわりを日本の政府が引き受け、日本全体を「沖縄化」しようとしているのである。

沖縄の現実はあるだろうか。ますます強化されるだけである。沖縄にまだ戦後はない。

ますます強化される沖縄の基地

アジアから見た8・15

私の国フィリピンの民衆の間では、現在、政府の正規軍及び準軍部隊を「ハボン——日本軍」と呼んでいる。それは、特にこの数年来、政府の軍隊による住民への残虐行為がふえる一方で、戦時中の日本侵略軍に比類するものになってきたという意味が含まれている。また、現在のフィリピン民衆、特にあらゆる地域での農民、労働者、少数民族、スラム街の住民などから見て政府の軍隊は「恐い」と同時に「憎い」ということでもある。「ハボン」という呼び名はこのような民衆の感情をあらわしていると同時に、蔑視の意味も含まれている。

私が育った町ロス・バニョスでは、日本軍が数百人の住民を教会に集めて閉じ込め、焼き殺したという事件があった。今でもそのことを語る犠牲者の遺族、親せきがいるが、これが当時として決して孤立した、珍しい事件ではなく、日本軍の残虐行為のパターンであるということはフィリピン人の間で疑いの余地のないことである。戦後生まれの私には、子

殺害の犠牲者は五万人にもものぼるといわれて、今もなおふえる一方である。

「これはフィリピン国内の問題で日本とどんな関係があるか」と思う方も多いかも知れないが、フィリピン民衆へのこの暴力的な構造を支えているのは、実はアメリカの経済的及び軍事的介入、そして第二に、日本の経済的介入である。これによってフィリピンの自然の富——山、海、森林、豊かな土地、民衆のたくましい労働力——は、フィリピン民衆に還元されるのではなく、一部のフィリピン企業家・権力者と、かれらと手を結ぶアメリカ、日本を始めとする外国ベースの企業に吸収されてしまおうという構造である。例えば、日本で安く手に入るバナナの大半はフィリピンのミンダナオ島の三万ヘクタールの最も良い土地で作られ、飢えている民衆からその土地を奪っている。最近小漁民は、日本の大型漁船の進出によってとる魚がなくなってしまう。フィリピンの森林が、一部のフィリピン合併会社と日本そ

の他先進国の会社によって切りとられ、植林されないまま、はげ山となり、民衆のいのちを奪う洪水の原因となる。他にもあげられるが、このような状態に対して抗議の声をあげるということは政府の強硬な手段をまねくということである。

フィリピン民衆は今、アメリカによる新植民地主義に手を縛られていいる上に、日本の第二の侵略にさらに悩まされて、自分の生活、自分の運命を自らの手で決めることができないという状態に置かれている。フィリピン民衆は今、新たな八・一五を待ちわびて、そのために声をあげていのちをささげることが覚悟している。日本の皆さんにお願い申し上げる。どうか、過去の出来事をばやかさないで、軍人・住民を含む日本の戦争犠牲者を追悼すると同時に、日本軍の手によって犠牲者となった数えきれないアジアの人々のことを忘れないで、同じように追悼してほしい。そして、過去の加害者の立場を直視し懺悔して再びそんなことを起こさないように決心すると同時に、現在のアジア民衆に対する第二の侵略における加害者の立場も直視し、追求してアジアの人々と手をつないで本当の八・一五、本当の平和の日に向かって共に歩みつけてほしい。

第2信

アジアの旅から

東南アジアから見た教科書問題

シンガポール 松井 やより

「東アジア、東南アジアに日本が来た時期は苦しみ以外の何ものでもなかった。マレーシアでは、日本の侵略と占領が数限りない死と苦痛をもたらしただけでなく、分裂し支配せよ、政策で人種の分裂をもたらし、右翼的保守的日本人がこの歴史をこまかそうとする企ては、不正をさらに重ねることだ。もっと重大なことは、日本の若い世代にわい曲した歴史を叩き込み、日本人自身と他のアジア人についてゆがんだ見方をさせることになり、双方の関係に危険な影響を与えることだ。……私たちがこの時期の歴史から学んだ教訓は、侵略、植民地化、占領、人々の苦しみに反対することである。この時代のあとに生まれた私たちは、とくにこの時代の歴史を記憶し、この歴史を決して繰り返さないようにする責任がある。」

私の両親は文盲だが、私にこの投書をするよう励ましてくれた。母の最初の夫は海南島で抗日闘争をして日本兵に殺された。父はマレーシアのセントールの人々に爆弾が降り注いだこと、クアラランプールのパツト通りに切り落された中国人の首がいくつもさらされていたことを思い出して涙を流す。父母がいたいことは、戦争は二度とごめんだ！（戦後生まれマレーシア人）

「フアイースタン・エコノミックス・レビュー」(82年9月10-16号)にのったこの投書の主は、実は私の親しい友人雅英(ライ・アーエン)だ。中国系マレーシア人で、英国留学からもどってシンガポール大学で社会学を教えているまだ三十代の女性である。日本の教科書問題が報道されると、せきを切ったように戦争のことを私に話すのだった。

「両親はいつも戦争体験を話していた。母は小さい子ども二人を天びんにかついで爆撃から逃げまわった。父は日本軍に取り調べられ、指の爪を尖ったもので突いたりむごい拷問をされた。街には死体がいっぱいころがっていたんですって」

もう一人の友人、蔡史君(チュア・サークン)さんはシンガポール人で、日本や英国に留学して東南アジア史を専攻、「日本占領期の軍政」を研究テーマにしている女性だ。最近まで、文化省の公文書口述史局で、日本占領下の体験をテープにとるプロジェクトを担当していた。それだけに、日本の歴史教科書改ざんの報道には啞然としていた。

「シンガポールでは華人虐殺事件もあって、侵略以外の何ものでもないのに、進出ですって？小学校の同級生にも、お父さんを殺された人が何人かいて、なかには母子家庭

で生活に困り、お母さんが洗たく婦なんかしてどうにか暮らしている友だちもいました。占領下の生活を証言してもらう仕事はつらいという。「あまりにむごたらしい体験談に、二、三日食事がノドを通らないこともあるんですよ。でも、日本人はシンガポールで起こったこととどれだけ知っているのかしら」と嘆く。

恐怖の支配

一九四二年二月、マレー半島を南下してシンガポールにだれ込んだ日本軍は、「昭南島」と改名してきびしい軍政をした。占領四日後、華僑男子全員を数地点に集結させ、検問して、抗日分子と見なされた者は連れ去られて帰ってこなかった。彼らは東海岸トカンに連行されて機関銃で射殺され、砂に埋められた。また、プラカマンティ島(今はセントーサ島と呼ばれる観光地)近くにはしきで運ばれ両手を後にしられ、たまたま機銃掃射を浴びせられて海中に散った。これは、戦後の軍事裁判で明らかにされたことで、「犠牲者の血で海面が真っ赤に染まるのを見た」とインド人灯台守が証言している。「苦難の昭南時代」暗黒の三年八ヶ月」などと呼ばれる日本占領時代のことを、シンガポールの小中学校教科書はくわしく書いている。小学



あげ、売られていた「日本軍の残虐行為写真集」



1982年9月シンガポールの夜市で山のように積み

校五年用の中国語の社会科教科書には「日本軍はシンガポール人が日本に抵抗して義勇軍を組織し英軍に協力してシンガポールを防衛しようとしたので報復を決定、占領三日目に華人に集結地点に集まるよう命じた。彼らは酷熱の太陽の下に飢え渴きながら立たされ、幸運な人々は帰宅できたが、不運な人々は抗日分子とされてとらえられ、何万人もが日本軍トラックに乗せられて、郊外や海岸に連れていかれて殺された。何と残忍なことか」とある。

中国語中学校の世界史、シンガポール、マレーシア史でも虐殺事件にふれており、その犠牲者数は四万人、マレー半島と合わせて十万人としている教科書が多い。

英語学校の歴史教科書は、記述は概してよりクールだが、それでも「日

本占領」は「恐怖の支配」だったとしている。「ケンペイタイは残酷で抗日分子を拷問し、殺し、多くの人々を死の泰緬鉄道建設に送り込んだ。とくに苦しめられたのは華人だ。一九三七年から日本が中国と戦争したため、華僑は巨額の資金を集めて中国に送ったりした。日本人は何千人という華人を殺し、さらに多くが獄死した。」

シンガポールの空港から市内へ向かってブーゲンビリヤや色とりどりの熱帯の花と緑が美しい東海岸のハイウェイを走る日本人は、四〇年前の虐殺の現場だなどとは想像もつかない。道路沿いに立ち並ぶ高層団地を建設し始めた六〇年代半ば、犠牲者たちの白骨が大量に発掘され、悪夢の惨劇を裏づけたのだった。

日本の教科書に載らないアジア侵略

「各教科書の虐殺者数四万人というのは華僑遺族会の数字をもとにしていて、日本側にも数字は五千人で、防衛庁の戦史にもそう出ている。当時の憲兵隊長大西寛にいたっては、七九年に「華僑肅清事件の真相」なる本を出して、二千人にも満たないなんて書いています」蔡さんは虐殺事件の責任者の一人が平然とこんな本を出版していることに、何をかいわんやという口ぶりだった。

何しろ、日本の教科書は、南京、マニラなどと並ぶシンガポールの虐殺事件にふれているものは一つもないのだ。今回、中国や朝鮮韓国が強く反応したのも、両国に関する侵略、植民地支配についての記述が改ざんされたからだ。ところが東南アジアについていえば、「第二次大戦」「太平洋戦争」などの項目の中で「日本軍はシンガポールを占領し、ジャワ、スマトラに続いて、フィリピンを侵略し、ビルマを征服……」などと、ほんの二、三行で片づけているだけ。中には「日米開戦と同時に西太平洋の制海権を握り、まもなく東南アジアの大部分を占領した」と一行にも満たない教科書もある。シンガポールの虐殺事件にふれたものはただの一冊もない。

シンガポールにビジネスや観光に来る若い日本人たちは、こうした血塗られた歴史を知るよしもなく、官庁街の広場にひととき高くそびえる百二十五メートルの白亜の「日本占領時期死難人民記念碑」(67年建立)に目をとめる人も少ない。シンガポールの小学生ならだれでも知っている抗日英雄林謀盛——抗日義勇軍を組織したため日本軍に捕えられ獄死——その記念碑に関心を向ける日本人はさらに少ない。

「日本人の明治以来の脱亜入欧」思

想、その亜(アジア)は中国・朝鮮で、東南アジアはその中にさえ入っていないのではないのか。戦争中の軍部の資料にある「北人南物論」は、北には技術や文化を扱う人間がいて、南は資源、市場、労働力、それに女、つまり物しかないという見方だが、日本人は現在もその東南アジア観は変っていないですね」蔡さんの夫で、華字紙星洲日報論説委員の卓南生(ト・ラムセン)氏は耳の痛いことをいう。やはり、元日本留学生で、教科書問題では、連日のように、日本軍国主義復活の兆ではないか、などときびしい論説を書きまくった。

「日本に学ぶ」政策の影で

八月、福田赴夫元首相がシンガポールを訪問、元日本留学生たちを招いてパーティを開いたが、同行の亀井静香という代議士は卓さん夫妻にまくし立てた。「外国に何かいわれて教科書を書き換えるなんて独立国家の主権侵害だ。内政干渉だ。マスコミの偏向報道がけしからんのだ」と。しかし、このパーティではシンガポール元日本留学生会の范介璋(フアン・カイチャン)会長が教科書問題にふれたあいさつをし「シンガポールでは、表立った抗議はないが、それは、われわれがこの問題に無関心ということでは決してない。歴史

ろう。マレーシア政府も「東方を見よ」政策をとり、やはり、教科書問題での抗議はなかった。ペナンの英字紙「スター」にコラムを連載しているマレーシアの最古参事ジャーナリスト、コー・チャンギ氏は、戦争中の体験をよくとりあげているが、私が尋ねると「今は日本と友好関係を強めるべきなので」と戦争体験にふれたがらなかった。

軍国主義復活を恐れるアジアの人々

もう一つは、これらの国々はきびしい抑圧体制のもとにあり、言論の自由が制限されていることもある。とくにシンガポールなど物々しいのを恐れているのだ。

さらに、歴史教育も政府の統制下にあり、若い世代が自主的に日本占領下の歴史を掘り下げるといふこともない。歳月と共に、親の世代の戦争体験も風化し、こんどの教科書問題で改めて若いシンガポール人に戦争の問題をつきつけることになったのは皮肉だ。

こういうきびしい状況のもとで、シンガポール放送局(SBC)が教科書問題の番組を作りたいと、私のところに取材に来た。私はインタビュアーに応じた。教科書の検定の問題にもふれ、歴史のわい曲はすでに始まっていたこと、国内での運動が地道

はり教科書問題が出た。韓国女性たちが提起し、一人の女性など、「日本品ボイコットを」という強硬意見まで出した。これに対し、香港の若い女性が「私たち戦後世代はいままで過去にこだわらず、キリスト教の救済の精神で対応すべきだ」と発言すると、年輩の香港女性が怒りにふるえながら「日本軍に殺された同胞の首をぶらさげて歩いている記録映画を見たりしたら憤りがこみあげてきた。赦すとか赦さないの問題ではない」と反論、会場のけわしい空気を感ぜしめた議長が「祈りましょ」といった。オブザーバーで参加していた軍拡問題に関心があるという朴善愛(パク・ソネ)さんは思わず手をあげ、制止をふり切ってマイクにかけ寄った。「教科書問題は日本と韓国や中国との間の問題ではなく、世界的に進んでいる軍備拡張、軍事化の現われなので平和を築く観点から、日本の教科書問題を徹底追及すべきだ」と必死で訴えるのだった。

東南アジアの人々が恐れているのは、まさに日本の軍国主義復活、軍事大国化であり、教科書問題はその一環としてとらえられているのだ。各国政府の対応でなく、各国の民衆の声なき声に耳を傾けたい——四十年前太平洋戦争はついに終結したが、改めて痛感する。(82年12月8日記)

教科書から侵略の文字が……

—日本の教科書・アジアの教科書—

「検定」検閲」を問う

歴史の事実が正しく記載されていないという中国、韓国の政府および人々による日本の教科書批判により、教科書問題は国際問題となつて家永訴訟以後久々にマスコミ誌上にぎわし、論議をかもし出した。

かつて高校で社会科を担当し、その内容の変遷を目にしてきた私自身にとつて「侵略」か「進出」か等の用語の論争以上に教科書の内容の問題を考えたと思う。

「侵略」にしろ「進出」にしろ語られる事実が正しく詳細であればある程、その内容は言葉がどうであれ、中味は侵略行為であつて決して進出でないことは生徒にとつても明確である。然し、その表現がいまいで、具体的事実が不十分な時、歴史の見方がはつきり定まらないばかりか事実に対する誤解を招く危険性が生じる。この教科書の問題は、「検定」というより検閲である」(家永三郎氏)といわれる検定制、また一九六四年から実施された新たな教科書制度に拘束されていることは周知の事実である。

この観点から今回の教科書問題を次の二点に集約して整理してみたい。

(一) 現行の検定制と社会科の指導要領の変遷について。
(二) 中学校、歴史的分野における内容の問題について。

現行検定制と社会科指導要領

現行の検定制は一九四八年新学制の下で国定制度が廃止されると同時にそれにとつて代わる。

一九四七年に出された学習指導要領も試案であり、「教科書検定に関する新制度の解説」で「……教科書採択は、教師の意見を十分とり入れた後に学校責任者が教育上最も適当と考えられるものを選ぶこと」と述べている。

同年の文部省発行「村の子ども」の最後の「教師と父兄の為に」の部分でも「この本は児童たちに社会科学習の手がかりを与え、その学習の進め方を暗示しようとして若干の資料を提供している。……従来の教科書のように考えてはいけない。むしろ児童用の参考書の一種として取扱つていただきたい」、現在の文部省の教科書観と比べるとその違いに驚かされる。

そもそも検定制は公選制の教育

委員会がおこなうことになつていた。

しかし、一九五三年の用紙割当制の廃止までの間、暫定的に文部省が行なうということになり、それが一九五〇年朝鮮戦争後文教政策の転換、(アメリカの日本を反共の防波堤にする為の右傾化政策)の中で、検定は文部大臣に与えられたまま現在に至っている。

一九五四年の池田、ロバートソン会談では防衛のための愛国教育が強調され、翌年「うれうべき教科書の問題」というパンフレットを民主党は作成。検定は厳しくなり、一九五六年にも悪名高い教育二法「任命制教育委員会法案」「教科書法案」が国会に上程され、前者は成立し、後者は廃案となつた。しかし文部省は教科書法案の内容を行政措置で実行。常勤教科書調査官を設置、行政指導により郡市別の広域採択を指導、五八年には「学習指導要領」が試案が消え法的拘束力をもつようになると共に新たに小・中学校に「道徳」の時間が特設された。

一九六二年「教科書無償法」が国会で成立。六四年から実施。これにより採択権は教師から奪われ地方教育委員会におかれることになり、出版社も検定広域採択制という教科書の国家統制が確立する。

その後の教育の反動化はよく知ら

れるところであるので省略したい。しかし、これらの政策が政策として実現していく為にはそれなりの受け入れと支持があることが必要で、動評闘争にしろ学テ反対運動にしろ主任制導入にしろ、その都度日教組により反対の闘いが組まれてきたにもかかわらず阻止しえなかったことをもう一度自分たちの側の問題として考え直す必要があることを痛感する。

中学校社会科歴史的分野の内容

現在、出まわっている中学校社会科歴史的分野七冊の中で特に近代史に相当する箇所を比較、検討した結果を述べてみたい。

満州事変、日中戦争の勃発の原因など各社それぞれニュアンスの違いがあり、相対的にはよりよい教科書といふことはできるが、原因が軍部のしわざであるという表現、もしくは「一九三七年七月、北京郊外の蘆溝橋で日中両軍が衝突した。この事件をきっかけに、日本軍は宣戦布告のないまま、戦線をどんどん広げていった。これが日中戦争のはじまりである」(学校図書P二六三ページ)にみられる様に突如として戦争は始まるかのような客観的描写が主流を占める。清水書院(P二二二ページ)第八章「二度の世界大戦と日本」の

序文には峠三吉「原爆詩集」の中の誌が引用されている。「二度にわたつておきた世界戦争を事実をもとにしっかりと学習しよう。そして悲惨な結果が全世界の人々の上になぜおこつたのか、どうして防ぐことができなかったのかを考えてみよう。」

この詩の訴えている悲しみと怒りを全世界の人々の上にくり返さない為には私たちはこれからなにをすればよいのだろうか

問題提起は実に素晴らしい。しかし「事実」の内容が問題であるし、また戦争が人々の生活に及ぼした点を考え、問題解決の手がかりをつかむにはあまりにも資料がとぼしい。それどころか文部省は丸木位里、俊夫妻の「原爆の図」など「暗すぎるもの」は削除、「暗すぎるもの」が削除されて戦争の本当の姿がどうして把握できるのか。それともそれ程悲惨でない戦争など文部省は存在するとでも考えているのか。

「社会科教科書の日米比較」(教科書研究センター編者)の中で、アメリカは日本の歴史の教科書は事実の羅列にすぎず、人間不在、社会不在の歴史であり、大恐慌戦争が農産物価格にどの様に影響を与え農村は疲弊し、人々の生活にどの様な影響を与えたかの記載がほしい。記載が国家の視点のみであると指摘してい

る。

どの国がどの戦争に参加し、どの国が勝ち何という条約が結ばれたか、その結果国の領土はどうなったかを私たちは暗記させられてきた。どの様にして民衆が戦争に動員されていったのか、その結果人々の生活はどの様に変わったのかという記述が少ない。

今回中国や韓国から抗議、訂正要求のあった南京大虐殺の記述は七冊中、二冊あるのみで、しかもほんの二三行にすぎない。

中国、朝鮮人の強制連行はどの教科書もふれてはいるが日本書籍以外具体的数字もなく「……ひどい条件の下で炭鉱などの労働に従事させた」(東京書籍)にとどまっている。

私たちのないうること

今回高校歴史教科書を中心に『侵略』などの具体的事項についての検定方針(案)が明らかにされたが、事項が形式的に記載されたとしても、何ら現在の教科書問題解決に結びつくものではない。

教育政策が憲法、教育基本法に基づいた平和の心を創り出していく為の、人権意識確立の為と位置づけられ、検定制そのものが廃止されなければ問題の解決にはならないことは明らかである。



船橋 邦子

中国の歴史教育

今回の教科書問題に対する、中国・韓国両政府の抗議は極めて強硬なものであったが、その政治決着については、すっかりと納得できないものを感じる。それは日本政府の対応が、いかにすりかえと、ごまかしによるものであるか、基本的な姿勢としては何の反省もなく、もとのもくあみではないのかと、不信感を抱くのは私ひとりではあるまい。

「日本鬼子」

教科書問題がおきた時に、最初に頭に浮かんだのは、私をはじめとして中国を訪問した時（一九六六年）、北京の革命博物館を見学したときの事だった。中国革命闘争の歴史をパネルや、当時の武器が館内に年代順に陳列されている中で、ひとつの小さな少女の像を、小学校四年生位の子どもたちがぐるりととりかこみ、ひざをかかえて坐っていた。教師が指揮棒を持ち、その像を指しながら、すき通るような美しく、激しい声をふるわせて子どもたちに語りかけている。私たちが通りかかるとピタリと説明を止めてしまった。子どもたちが不思議そうに後を振りかえる。そ

して静かに私たち日本の青年九名が通りすぎるのを見守っている。当時日本は中国を仮想敵国として敵視し続けていた。日中を往来する人たちは年間三千名余りで、日中友好協会、青年連合会、学生連合会の招待による青年訪中団の一員として、はじめて中国を訪ねることのできた私たちに対する中国側の熱いもてなしと歓迎に、ただただ感激しながら各地を友好訪問、見学と交流を重ねている最中のことであつた。

涙を流し、声をつまらせながら子どもたちに証明していたことは、彫像になつていく少女が、いかに愛国心に燃え、日本軍と闘い、どのように悲惨なやり方で虐殺されたかということであつた。「日本鬼子」と強いのしりの言葉をあびせている最中に日本人である私たちが、言葉の意味も解らずにここに立っていたわけである。外国からの訪問客には常に礼儀正しく、最初はびっくりしていた子どもたちもニコニコ手を振ってくれたことを昨日のこのように思い出す。

再び問われていること

新しい中国の建設のために、それを担う子どもたちに、いかに多くの犠牲と闘いがあつたかを、具体的にひとつひとつ教えていた中国、歴史の教訓はいたる所にあり、自分たち「人民中国」を再び他国に侵略はさせないという気概で満ちあふれていた。劇を観ても、映画を観ても、人民の敵—日本軍と闘う英雄が主人公であり、日本人に扮する役者が出てくると、場内は騒然となり、解放軍が勝利すると拍手がわき起こる。日本人人民と一部軍国主義者とは区別する「日本軍国主義は日中両国人民の共通の敵です」といふ説明も、まぎれもなく日本人である私には辛い旅でもあつた。

今年は日中国交回復十年、友好ハネムーンの政財界主導型、記念行事がさまざまな形で企画され、日中間の往来は大巾に増えつづけている。その中でおきた教科書問題に対する中国からの厳しい抗議、平和の「原点」は何であるか、正しい歴史認識—侵略したことは事実であるという認識の上に立つた、新しい出発を強く要求されたのである。

私たちの国の歴史が意識的にゆがめられていくことを侵略されたアジアの国々は決して許すことができないし、忘れることはない。

歴史の改ざんを進める日本の政策

これが侵略の実態だ!!

—アジアの教科書より—

中華人民共和国

日本侵略軍はいたる所で、焼き、殺し、奪い、残虐の限りをつくしたため、無数の都市と農村が廃墟と化し、何千万何百万の中国人民が殺された。日本軍は南京を占領した後、気遣いじみた大虐殺を展開した。南京で平和に暮らしていた住民は射撃練習のために、刀で切られ、石油で焼き殺され、生き埋めにされ、はては心臓をえぐりとられる者もあつた。一ヶ月余りのあいだに殺された者は三〇万人を下らず、焼かれたり壊されたりした家屋は全市の三分の一に達した。南京城内には死体が果々と横たわり、ガレキの山をなし、暗くて寒い風が吹きすさび、さながら人間地獄と化した。敵の残虐さ、凶暴性は全国人民のたとえようのない憤怒を激しく呼び起こしたのだつた。（中国歴史 初級中学用 一九八〇年版）

大韓民国

日帝は兵站基地化の経済政策を進行させる一方、我が民族の抹殺政策をくりひろげた。我が民族の特性を根こそぎなくさねばならないと判断して我が民族を抹殺するため、さまざまな手段をつくしたのだつた。彼らは調子よく「内鮮一体」とか「皇国臣民化」とかいう言葉を振りかざして、一九三八年からは学校教育で我が国語の使用を禁止し、日本語の使用を強要し、我が歴史の教育を廃止した。—略—そして日本の神

に抗議する声が、四十数年前の暴虐を一瞬のうちによみがえらせる。中国各地からの怒りの声、虐殺された体験談が昨日のことであつたかのようには語られ紙面に掲載される。

体制の全く異なる「台湾」に於ても日本に対する中国人としての怒りは当然同質である。

中国と、台湾の歴史の教科書を読むと、日中戦争、国内戦、現在の中国の歴史的立場づけなどは全く正反対の記述が至る所で見られるが、日本侵略軍に関する記述、例えば南京大虐殺についての記述はどちらの頁をさしかえても全く変わらない。

今回の教科書問題に関する日本のマスコミの報道は主として、中国政府や韓国政府の抗議が中心であつたが、アジア各国の民衆の怒り声は、

在日朝鮮・韓国人からみた教科書問題

「神社参拝は奨励ではなくて、強制でした。」—在日韓国人のPさんは一九三〇年代半ば、故郷の全羅道で宣教師経営の女学校に入学した。小学校にすら上れない女の子が多かつた中で、キリスト者の家に育つたPさんは幸せな例外だつた。だが、まもなく総督府から、ミッションスクールに対して神社参拝の命令が出

された。

「先生方は、初めは抵抗したのですが、抗しきれず、ついに全校生徒が全州神社に参拝することになりました。最初にまず、日本人の先生が見本を示したあと、私たちもいっせいに頭を下げることになりました。今も、そうですが、その頃、私は背が低く、ころころふとっていました。」

いまや「市民服を着た軍隊」として、アジアの国々の人のうえに君臨する日本人としてイメージされている。侵略した側の日本の民衆が、された側の国の民衆の抗議によって、日本の歴史の問い直しを迫られるという情けない状況を私たちはいつまで許していくのか。

最近のアジアブームの中で厳しく日本のあり様を問われていることに私たちは何を答えるのか。

「アジアの女たちの会」発足にあつた「再び被害者の立場に立つことを拒否」することから始めたいと決意したことをかみしめたいと思う。警察国家内閣の発足を許す日本国民は、アジアの民衆にとって侵略国家日本がオーヴァラップしているにちがいない。

五島昌子

そこで、私が、とつさに思いついたのは、だいたいようぶ、私は背が低いから、頭をさげなくても、制服のスカートの下でちよつとひざをかかれば、みんなと同じぐらいの高さになるから、分らないですむということでした。でも、私もやはり、ひざをかかめたのだから、同じことですね。それから間もなく、私たちの学校は廃校処分になりました。神社参拝に反対した教師が五〇人も獄死したと知つたのは、ずっと後のことです。本当にあの頃の朝鮮ではみんな日本人の調査がガチャガチャとサーベルの音をたててくるのを、みんなが恐れていました。

Pさんは戦争中來日して家庭をもち、こどもたちはみな日本で生まれ、教育を受けた。今では日本の公立小学校に通う孫もいる。十年この方、Pさんは在韓被爆者の問題にかかわり、また生活保護を受けたために退去強制処分を受けた同胞の女性の面倒をみたりする中で、日本の政治を女の目で見て来た。

日本の新聞やテレビに報じられた教科書問題はPさんにとつても大きな関心事だつた。Pさんの体験からみても、日本政府の検定基準はおかしい。だから、母国の教会の婦人たち（韓国教会女性連合）が、日本の教科書検定に抗議し、すみやかに検

インドネシア

日本植民地時代に一番苦勞したのは「労務者」たちであつた。彼らは強制的に日本軍の軍事関係の滑走路工事、鉄道工事、防衛地区で働かせられた。—略—最初彼らを「労務者」になるよう口説き、それが成功しないと強制的にひっぱたいていく。「大東亜のための繁栄」という宣伝にだまされて、人力の取り集めは簡単だつた。数千人の「労務者」がジャワ島以外の島へ、さらにマレー半島、ビルマ、タイなどに送られた。「労務者」たちへの扱いもひどく、健康

定の基準が改められない場合は、いかなる手段も辞さないとの声明を発表したとき、Pさんはわがことのよ

うに喜んだ。
さっそく、Pさんは知りあいの日本

もPさんは、この問題が起ってもう一度認識した。
政治などとは遠くはなれた場所

のクリスチャンの婦人にこのことを伝え、日本の教会婦人会もこの問題をとりあげなくてはと説いた。日本

の教会も、教科書の集会をするようだからいっしょに出ようと誘って

事実を直視した東南アジアの教科書

今回の教科書問題で、東南アジアの国々からの日本政府に対する直接

の抗議はなかった。中国・韓国への侵略の事実をやつと認識しつつある

の仕事しか出来ないということでした。戦争では、自分の国の戦争でもないのに、多勢の人が戦地や徴用に

ひっぱられました。私の弟も戦争にとられました。それでも、戦争で死

んだ人にも一銭の年金もないし、まだサハリンから帰れない人もいます

が植民地の時代でした」
小学校へ行ったかったのに、その

頃女の子は学校に行けなかったで、自分で字を覚え、日本へ働きに来て

も保証されず、食物不足、重い仕事で追いつめられ、仕事場でたくさん

の人が死んだ。
食糧も日本軍政府に絞り取られたため庶民の生活がますます苦しくな

マレーシア

日本下のマレー半島

マレー半島の人々が日本軍の残虐さについて最初に経験したことはほとんど大きな都市で見られたことだ

イトルがつき、一章以上を費してその詳細が綴られている。各国領土への

が、それを信用するのはとんでもないまちがいだということがすぐわか

の日本侵入以前までの「日本の膨張」の背景と展開についての説明は客観

「独立」につながるべきこととして、日本占領の意味は小さくないが、あ

「日本はアジアの民衆を白人の圧政から解放し、独立を与え、アジア

は我々の歴史の中で最も暗い幕合劇

教科書問題

アジアからの反響

タイの雑誌「サイアムラット」八月二二日号より抜粋

明治時代から経済力をもっている財閥が今でも存在している。名前が変わつてもそのような関係がまだ続いている。現在の日本政府は防衛費をGNPの一

文部省は歴史教科書を改訂するための努力をしている。しかし、中国人や朝鮮人をたたくん殺し、また反日運動



後略

（フィリピン）であり「大東亜共栄圏にはなんらの繁栄もなかった」（マレーシア）のである。
日本の占領支配を描く構成要素は

反感をもったであろうことが察せられる。
やがて日本の敗戦による解放、そして独立闘争へと歴史は進む。日本

一、労働力の搾取……数知れないロームシャの徴用、強制労働、その取り扱

現在の教科書は二十年前と比べて「日本の戦争」の描写のトーンが落ちて

一、経済的搾取……現地で生産される食糧や資源を軍需物資として日本

草野いづみ

集会 教科書改悪は許さない!!

報告

「戦争はあやまちであつた」とする文部省の一九四九年までの公式見解が、五二年の池田口バートソン会談ののち一八〇度の転換をとげ、六三年には家永教科書の検定不合格によつて私たちの目の前にはつきり見えてきた。

国定教科書によつて忠君愛国を叩き込まれ、戦争に参加した世代の人間としては、「聖戦」とか「やむを得なかつた戦争」などとして浮上してくるのは黙視できない。

八二年四月のNHK特集で教科書調査官の執拗な書き直し要求のやりとりの録音テープを聞いたが、それこそ文部省の「偏向した」思想に根ざしていると思つた。



教科書問題に抗議する集会

七月三〇日、衆議院外務委員会での教科書検定についての質疑を傍聴する。文部官僚の答弁には全くいらさぜられた。なかでも玉城議員（沖縄選出）が住民虐殺を検定で削つた理由を質したのに対し、検定課長は、八百人という数字について確たる資料の提出がなかつたからと答え、県史をも認めないという答弁を繰返したのにはもう少しして叫び出しそうになつてしまつた。

八月二一日「アジアのわたしの会」は、八つの市民グループは、「教科書問題で文部省に抗議する集会」を清水谷公園で、五島さんの司会を開いた。

閉会後、教科書問題を考える市民の会「が抗議文を宮沢官房長官に手渡したが、中国や韓国の記者がカメラを廻して取材しているのが印象的だつた。今この時、各国民衆もまた大きな関心をもつて成行きを見ていくことを強く感じた。

八月二六日、教科書問題に関する「政府見解」が出されたが、侵略戦争と植民地支配の罪責をはつきり認めたものでなく、姑息な言いわけに過ぎないため、二二日の集会参加団体では急遽、意見書をまとめ、政府に抗議した。

九月一八日は「一五年戦争開始の日」に政府・文部省に抗議する市民デモ。デモに先立つ集会で来日した香港の学生が民衆同士の連帯を呼びかけた。この日、香港では日本軍国主義に反対する一万人集会が開かれた。日本政府は、検定を決して後退させまいとする文部省を押し切れず、対応は玉虫色で信用できない。加えて「新聞の虚報が国辱的な外交をとらせた」とする言論人や、売国奴がいる」とまで言われている現状では、教科書問題というより教科書そのもののさえどうなるか、解決に近づいていくとは言えない。しかし、アジアの国々から民衆のナマの声が日本にまで届いたこの半年をふり返ると、皮肉なことだが無駄ではなかつたと思う。毎日の新聞・テレビによつて若者は教科書には書いてなかつた侵略の事実を映像によつて知り、体験者はその重い口を開いて加害の歴史を語りはじめ、国の内と外で同時に「侵略」を追体験したともいえるのではないだろうか。

谷 民子

ひろば

「アジアのわたしの会」のあり方に現在非常に魅力を感じます。

時代の批評や批判をする人々は増加していますが、行動する人々の少ないのは残念です。

私も六十八才の年令になりますが、今日迄反戦デモや水問題等で、地方裁判所（大津・大阪）へよく出かけて参りました。一番動きやすい私達年輩の者が動かねば、若い人々に申しわけないと思つています。

（大阪 M・K）

「わたしの会」の機関誌三〇冊、「八・一五とアジア」のパンフ二七冊完売しました。「女大学」のテープも、近頃は活用してくれる人もふえて、カ

メの歩みながら少しずつ良い状況になりつつあると、自分だけで評価しています。

（カゲの声）「自分の頭で考え、自分の足で歩くようになった」——影法師におびえなくなった——？

（仙台 Kさん）

今春、初めて「女大学」に出席しました。いつもいつも何かせずにはられないのに、なかなか自分からチャンスを作らないので……。

女として生まれて、いろいろな生涯があるけれど、私も自分さえいければそれでいい／なんて、とうてい思えません。

絶対負けないで下さい。私も努力して、もっと精神的な自立に目ざめさすよう努めてみようと思ひます。

（東京 K・M）

六月に渡米した折、サンフランシ

戦争攻撃は、具体的かつ身近に行

スコでアジア人の反核グループ（B A A N D）と知り合いました。「今年になって初めて、アジア人が反核の旗の元に結集したのは歴史的なこと」と、彼らが口々に言っていました。彼らと連絡を密にして、環太平洋反核同盟のような市民組織を作れば最高です。

機関誌12号の近藤和子さんのレポートの結びに、そのアイデアがありましたね。

（大津 I・M）

またまた優生保護法の改悪が浮上してきました。福岡でも先日、県議会最終日に自民党を中心に、改正推進の決議を上げるという動きがありました。幸い、これを前もってキャッチした社会党議員、女性団体、労組員らが駆けつけ抗議した結果、撤回させることができました。

（大阪 学生 K・S）

これまでに在日韓国人政治犯救援の運動などに参加してきましたが、社会を変えたいと思ひ動いていても、確かな展望が見えず、いつも何かしら悲観的なためらいを感じてきました。最近になって、権力を志向する男性社会の文化そのもののとらえ返しを考へようになつて、この見方をもっと押し進めていけば、本当に自分の感情や、自分の生活と一致した闘い方ができるようになるのではと信じてはじめています。

（福岡 S・M）

活動報告

（1981年6月～11月）

- 6・3 ヨコスカ基地見学
- 6・9 「フィリピンの女性と連帯する夕べ」 シスター・メリージョン、マナンザンさんを囲んで
- 6・13 「核と戦争のない世の中をめざす行動、6月」集会参加
- 6・16 女大学「アジアに見る侵略戦争の爪あと」（韓国・台湾）定例学習会「ある女の戦争体験 PART I」
- 6・26 女たちの映画「声なき叫び」
- 7・11 女大学「アジアに見る侵略戦争の爪あと」（フィリピン・マレーシア、タイ、ビルマ、沖縄）
- 7・21 定例学習会「ある女の戦争体験、PART II」
- 7・30 「8・15とアジア戦没者追悼の日」に反対する一集会 アジア文化フォーラムと共催
- 8・7 「女たちは戦争への道を許さない」マラソン演説会」参加
- 8・14 夏合宿「戦争と私たちとアジア」東伊豆にて
- 8・27～29 「教科書問題に抗議する市民の集会」参加
- 9・18 女大学「なぜ朝鮮人が戦犯になったのか」内海愛子氏
- 9・23 定例学習会「在日朝鮮人女性に学ぶ」
- 9・25 「核と戦争のない世の中をめざす行動、10月」集会参加
- 10・16 「なぜ世界の半分は飢えるのか」著者スーザン・ジョージさんを囲んで
- 10・18 「10月行動」防衛庁軍拡抗議デモ参加
- 10・24 女大学「ジャーナリストの戦争責任」茶本繁正氏
- 10・28 「優生保護法改悪に反対する」集会参加
- 11・3 女大学「宗教者の戦争責任」今村嗣夫氏
- 11・17 定例学習会「現代帝国主義」武藤一羊氏
- 11・28 女大学「戦後思想と戦争責任」日高六郎氏
- 12・3

'83 春期「女 大 学」

テーマ 戦争と私たちとアジアⅡ
—侵略と性を考える—

1月18日(火) アメリカの軍事戦略と基地買春
—沖縄・フィリピン・タイ—
遠野はるひ氏 新里智子氏
2月18日(金) 従軍慰安婦にされた女たち
山口明子氏 五島昌子氏
3月16日(水) 輸入される女たち
三好亜矢子氏 塚本由美氏

場 所 渋谷勤労福祉会館 渋谷駅下車
参 加 費 500円(会員300円) 午後6時半～

機関誌「アジアと女性解放」

第1号 韓国民主化闘争の女たち 300円★
第2号 買春観光を許すな! 300円★
第3号 日本企業は海外で何をしているか 300円★
第4号 アジアへの文化侵略 300円★
第5号 いま戦争責任を考える 300円★
第6号 アジアの闘う女たち 400円
第7号 女と国籍 300円★
第8号 続・買春観光を許すな! 400円★
第9号 第三世界の女と私たち 400円
第10号 光州一周年によせて 400円
第11号 特集・暮らしの中のアジア 400円
第12号 特集・戦争と私たちとアジア 400円

★印は残部がありません

送料は1部170円です。郵便振替か切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

No.1 Asia and Women's Liberation
No.2 Japanese Economic Invasion
No.3 Prostitution Tourism
No.4 Asian Women in Struggle
No.5 Blown by The Winds of Asia
Price: Inside Japan No.1-¥300,
No.2, No.3 -¥400

Address(for Order):
Asian Women's Association
Poste Restante Miyamasuzaka Post Office
Shibuya-ku, Tokyo, Japan

あなたも会員になりませんか?

★今回(No13)は「8・15とアジア」を特集しました。
軍靴の響きがだんだんと近づいてきた今日、アジアの国々からも日本の軍事費増強に危惧の声があがっています。再び戦争への道を歩まないために、「8・15」が日本人にとって何だったのか、教科書問題やアジアの状況の報告をしております。一人でも多く読んで下さるよう、友人や知人に売って下さい。

★私たちの会も発足6年目をむかえ、活動も本格化しています。それに伴ない財政がひっ迫しております。ぜひ、機関誌を一人10冊まとめて買い、友人、知人に売ってください。

★年間会費は3500円です。会員には機関誌、ニュースレターを送るほか、会合のお知らせも随時しています。勉強会にも参加できます。

★会員の申込みは下記まで
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号

★お願い 財政がひっ迫しておりますので、まだ年会費3500円を、振込んでない方は下記まで至急お振込み下さい。ご協力をお願い致します。

送付先 アジアの女たちの会
新住所 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号
郵便振替 東京=0-46143

■連絡先が上記に変わりました。よろしく!

編集後記

★待ちに待ったNo13「8・15とアジア」が出ました。戦争と私たちとアジア」学習会グループの総決算。これで終わることなく、息長く続けていきたい。

★運営委員会のシステムも一年間たち、そろそろ定着してきた。勉強会、集会にと忙しい会の活動の中で、会員が勉強した成果がこの機関誌13号です。ぜひ多くの人に読んでほしい。

★13号いかがでしたか。右傾化にまけないように今年もガンバロー!
(N・I)

(Y・T)

パートタイムQueen A

—あなたは損をしていませんか—

国際婦人年をきっかけ

として行動を起す女たちの会

中島 通子 監修

いまパートで働いているあなた、これからパートで働こうとしているあなたに必読の本です。

職場の問題や人間関係のなやみなど、どうすればよいかをやさしく解説しております。

好評発売中

樋口恵子著

—愛と性と自由と—

各国「女性」事情

定価一、一〇〇円

学陽書房 東京都新宿区市谷薬王寺町26
電話 03 (341) 9131 (代)

銃後史ノート

第七号(復刊四号)二〇〇円

特集「女たちの十一月八日」

●座談会女たちの十一月八日

●櫻井たけ子氏 水沢 耶

●奈 買淫に情熱を注いだ田

●関千枝子 ●なみ 節

●子に半田たつ子 ●骨肉の

●情の共同幻想 鈴木スミ子

●トントントンカラリと隣組

●加藤朱美 ●統合と抵抗 加

●納美紀代 ●沈黙の中の戦時

●大宮みゆき ●教科書は、神聖

●なものであった 小園優子 ●歌

●いつといつのこと 三上由紀

●子 大迫倫子の「娘時代」と私

●椿芳子 ●田たちの衣生活

●むらき数子

第六号(復刊三号)

「紀元二千八百年」の女たち

編集・発行 女たちの現在を問う会 川崎市多摩区生田8-21-13(加納)
発売・(株) JCA出版 東京都千代田区神田神保町1-42日栄ビル2F